





東伊豆町誌  
町制施行30年

## 発刊に寄せて



東伊豆町長  
山田大八郎

昭和から平成へと移り変わった本年は、昭和34年5月に稲取町と城東村の合併によって東伊豆町が発足して30周年の記念すべき年となりました。この大きな節目を迎えるに当り、記念事業の一環として、発展を遂げた我が東伊豆町の歴史を後世に残し、将来本町を背負って立つ若者の皆さんにも本町の歴史を知っていただくために町誌刊行の運びとなりました。合併当初の当町は農林漁業中心の産業構造の町でしたが、伊豆の夜明けともいべき伊豆急行の開通によって一躍観光中心の町に生まれ変わり、今なお発展を続けております。そして、竹内前町長時代に「豊かな自然と人間の出会いを創造するまち」をテーマに東伊豆町総合開発計画（基本構想）を策定し、着々と町づくりを進め、ここに30周年を迎えた次第です。現在までに常備消防の設置、町のシンボルである役場庁舎の完成、町民憲章の制定などがなされ、自治体としての体制が一応のレベルに達したといえましょう。この間伊豆大島近海地震という未曾有の大災害に見舞われましたが、町民各位のご努力で見事に立ち直り災害以前にも増して順調に発展を続けております。これは我が東伊豆町が合併発足するまでの先輩各位の御苦勞と、合併後今日までの町民各位の本町発展のためのたゆまぬ努力の賜物と心から敬意と感謝の意を表すものであります。最後に、過去2年有餘にわた、資料の収集、原稿の執筆等に尽力された編纂委員の皆様へ深く感謝申し上げます。



## 町制30年誌の発刊に際して



東伊豆町教育長  
古屋 芳男

稲取町と城東村が合併して「東伊豆町」の誕生をみて30周年を迎えました。

時恰も平成元年となり、合併30年誌発刊の意義も一層深まったものと思われまます。

東伊豆町誕生以来30年を振り返りますと、社会の様目は、科学技術の進歩情報化、国際化、そして高年齢化のすう勢等、過去に例をみない変化の著しさであることは、周知のことです。

その、変化の激しい時代の跡を、資料を収集し、考察し、編集方針を決め、そしてその方針に沿って執筆され編集するという、困難を伴う作業を、実質1年7か月程の短年月で成し遂げられた、町誌編さん推進員、委員長を中心とした編さん委員、並びに専門調査員等各位のご苦勞とお骨折りに対し、まずもって教育委員会を代表し、心よりお礼を申し上げます。

こうした作業や仕事は、際限なく広くそして深く広がるものであると思ひます。従ひまして、短い年月では資料収集が不十分であったり、もっと調査を必要とするものなど、心残りのことが多々あったのではなからうかと推察いたします。

この「30年誌」の仕事の意義を更に高めるために、過去と将来の町誌に続きそして、編集委員各位のまだ不十分であるといわれる点を一層深めるための仕事へと発展する契機にするために、編集作業の過程や、収集された資料を整備していきたいと考えております。

21世紀への志向をするためにも、この30年間における社会の動向は、必要なことと愚考いたします。町民の皆様のご愛読を切にお願いし、発刊のことばといたします。



東伊豆町誌編さん委員長  
太田 禾一

## 発刊に寄せて

町村合併30年を記念して町誌を発刊するに当たり私共が編さん委員として昭和64年8月1日付で委嘱され合併30年のあゆみを主として町誌を編さんした。

編さんの基本的的の考え

海と山と温泉とに恵まれた個性豊かな郷土づくりをして来た東伊豆町と言うことで30年のあゆみをたどって見た。

編さんの方針

1. 合併30年を記念として発刊する。
2. 個性ある町誌を作りたい。
3. 平易に読める興味ある町誌にしたい。
4. 調査はあくまでも綿密に行い記事はあくまでも正確を厳守す。
5. 各章毎に執筆委員を割当ててあくまでも全員一致で協力して編さんに当る
6. 町民全体の協力を仰ぐ。
7. 記事は執筆者の主観を交えない。
8. 合併後を主として編さんする。

上記の方針により何回も委員会を開き内容の討議をして仕事を進めて来た。

尚先進地の菊川町大須賀町を視察したが我町はあまりにも短い期間での資料収集であったので編さん委員も何かと苦勞があった。

尚資料収集にあたり専門調査員又、町民皆様の御協力で感謝いたします。





いそぶき



早咲きざくら

### 東伊豆町民憲章（昭和59年1月10日制定）

東伊豆町は、天城の山なみを背に伊豆七島を望み、豊かな温泉にはぐくまれた平和なまちです。

この恵まれた郷土に限りない愛情と誇りをもって、うるおいのあるまちづくりをめざし、この憲章を定めます。

わたくしたち町民は

- 郷土の自然を守り、美しい町をつくります。
- 心のふれあいを大切にし、明るい町をつくります。
- 教養をたかめ、文化の香る町をつくります。
- 元気で働き、豊かな町をつくります。
- きまりを守り、住みよい町をつくります。

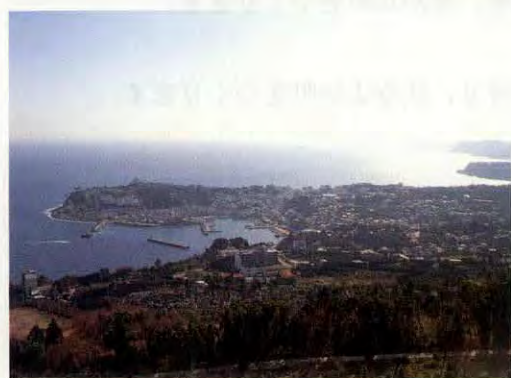




大川地区



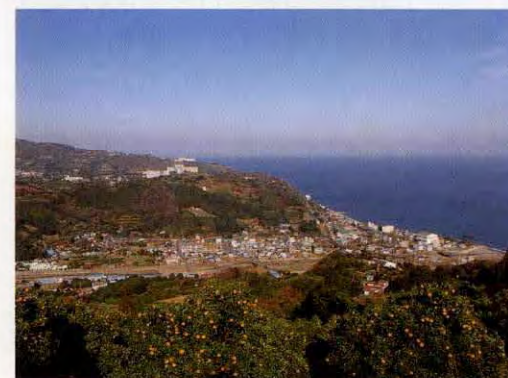
北川地区



稲取地区



白田地区



片瀬地区



熱川地区



# 東伊豆町30年のあゆみ



大川三島大社

## ●黒潮に乗ってきた出雲の神々

「伊豆」という地名の由来については諸説があり、はっきりしたことはわかりませんが、ふつう「温出ヅ」からきたと言われています。確かに数多くの温泉が点在する伊豆半島だけに、なかなか説得力がありますが、学者の間には「出雲」のイツが転化したものらしいという意見もある。

ところで、出雲といえば神無月（10月）には日本全国の神様が集まるという“神の国”です。その神の国、出雲と伊豆の関係といっても地理的にも離れていますし、あまりピンときませんが、そのつながりは次のように考えられている。

—まだ、日本が国家としての形態を整えていなかった遠い昔、出雲の神族である賀茂一族が、黒潮に乗って伊豆七島に來住し、それから半島に渡って各所を開拓したということです。

つまり、「イツ」という地名や賀茂郡という名の由来は、彼らがこの地に渡ってきたことに起因しているというわけです。

こうした伝説を裏付けるかのように、わたしたちの東伊豆町には出雲の神を祭った古い神社が数多くあります。なかでも賀茂一族を率いてきたという事代主命をお祭りした大川や稲取の三島神社などは、その代表的なものといえるでしょう。

昭和34年

1959



40年、済広寺カヤの木県指定文化財となる

34年、稲取町と城東村が合併して東伊豆町発足

36年、東伊豆町商工会設立



36年、伊豆急行開通



38年、町立双葉幼稚園設置



39年、熱川中学校舎完成



42年、県立稲取高等学校新校舎落成



43年、熱川地区学校給食共同調理場開設

昭和40年

1965



37年、東伊豆有料道路（熱川区間）開通



40年、東伊豆町、河津町の漁協合併、稲取漁業協同組合設置



40年、東伊豆町、河津町の農協合併、伊豆東農協業協同組合設置

41年、熱川電報電話局開局



43年、稲取電話局開局



1968



44年、じん芥焼却場完成



47年、稲取岬燈台完成



42年東伊豆有料道路  
(稲取区間) 開通



44年、東伊豆町合併10周年記念



52年、伊豆バイオ  
パーク開園



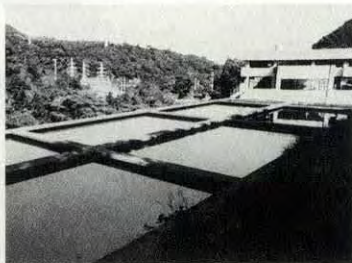
46年、熱川バナナワニ園分園  
落成



48年、広報無線設置



49年、町営総合グラウンド  
完成



45年、東伊豆上水道拡張工事  
完成



46年、熱川幼稚園  
完成

1975

1978



48年、東海汽船  
稲取～大島定期  
航路開設



52年  
片瀬地区土地  
区画整備事業  
業完成



48年、稲取町営住宅完成



53年、伊豆大  
島近海地震  
発生、大災害  
をうける

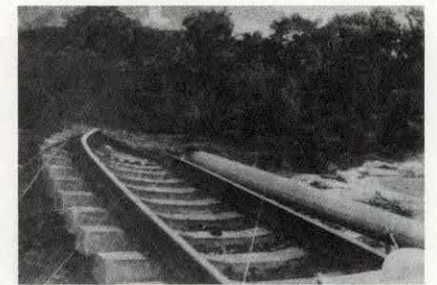
49年、伊豆半島沖地震  
発生



53年、陶器、絵画などの  
講座開設



52年、天皇后陛下バナナ  
ワニ園御来園



51年、集中豪雨災害(稲取～白田間  
道路寸断)

49年、第1回東伊豆老人  
スポーツ大会開催



50年、熱川小学校  
舎完成



51年、稲取小学校  
体育館完成



54年、大川小学校新校  
舎完成



1985

1989

57年、有料道路無料化



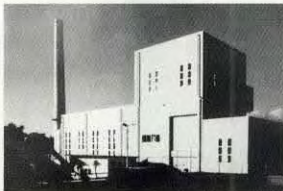
58年、東伊豆町消防署発足



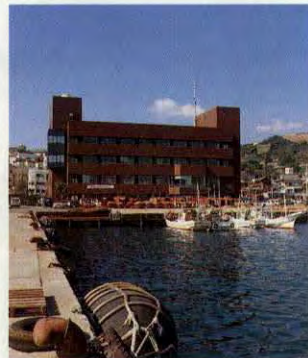
54年、白田地区都市計画事業着工



57年、国道135号線、白田バイパス開通



55年  
清掃センター完成



59年  
東伊豆町庁舎落成



61年、東伊豆勤労者体育センター落成



60年、郷土がるた発行

56年、総合計画「基本構想」議会可決

59年、町の木と花制定



60、岡谷市と姉妹提携をする



60年、東伊豆町商工会館落成



55年、稲取幼稚園完成



62年、稲取海浜プール完成



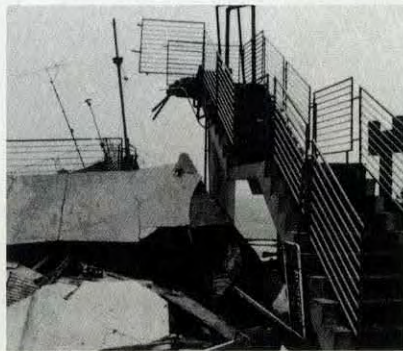
63年、東河環境センター完成





# 伊豆大島近海地震

・恐怖のM7.0  
大地をゆらす



1月14日午後0時24分、伊豆大島を震源とする、マグニチュード7.0の地震が発生し、平穏な土曜日の午後を迎えようとしていた当町を恐怖のどんな底に落とし入れるかのごとく大地を揺れ動かしました。  
死者9人、重傷者23人、軽傷者86人、全壊56棟、半壊460棟一部破損2097棟、電気、電話、ガス、水道などなくてはならない、公共施設も大きな被害を受けました。



旅のつかれをやすめる露天風呂



# 観光

みかん狩



# 東伊豆の観光の魅力は



名物金目鯛と伊勢えび

ふれあいの森 冬景色



熱川温泉の噴温





年中行事・文化財・遺跡



夏の風物詩—大文字焼

三番叟

神福竹



北川の鹿嶋踊り



峠遺跡発掘状況



招福面



江戸城築城に使われた畳石



東伊豆町誌  
町制施行30年



## 目 次

- 発刊のことば 東伊豆町 山田大八郎
- 町制30年誌の発刊に際して 東伊豆町教育長 古屋芳男
- 発刊に寄せて 東伊豆町誌編さん委員長 太田禾一
- 口絵写真

### 第1章 東伊豆町の概要

第1節 位置・面積・区分	1
1. 位置	
2. 面積	
3. 区分	
第2節	1
1. 地勢	
2. 地質・土壌	
第3節 気象	5
1. 気温	
2. 風	
3. 降水量	
第4節 人口	8
1. 人口・世帯推移	
2. 人口動態	
3. 地区別人口・世帯数の推移	
4. 年齢別人口構成図	
5. 就業者人口	
6. 流動人口	
第5節 交通	18
第6節 植物・動物	20
1. 植物	20
(1) 照葉林	
(2) 夏緑林	
(3) 海岸沿いの群落	
(4) 森林周辺の群落	
2. 動物	22



(1) 哺乳類	
(2) 鳥類	
(3) 昆虫類	
(4) ハ虫類・両生類	
(5) 磯の動物	
(6) 陸淡水産貝類	
第7節 歴代町長・助役・収入役・教育長・町議会議長・副議長など 選挙の状況	26
1. 歴代町長	
2. 歴代助役	
3. 歴代収入役	
4. 歴代教育長	
5. 歴代議長・副議長	
6. 歴代町議会議長	
7. 選挙の状況	
第8節 決算の推移	34
第9節 東伊豆町の経済力	35

## 第2章 合併前夜

第1節 合併前の稲取町・城東村	39
1. 稲取町	39
(1) 合併前の概況	
(2) 沿革	
2. 城東村	39
(1) 合併前の概況	
(2) 沿革	
第2節 合併前夜	40

## 第3章 東伊豆町の成立（創設期）

第1節 概要	47
第2節 東伊豆町の成立	47
第3節 伊豆急行開通～伊豆の夜明け	48
1. 伊豆急行開通	
2. 東伊豆の交通	
3. 東伊豆道路	

4. 東海自動車	
第4節 農業と、漁業の町から観光の町への歩み	53
1. 東伊豆町の温泉場の生いたち	53
2. 観光発展の始まり～第2次世界大戦を終って	54
3. 観光地としての形成の時代	54
4. 各温泉場の発展	56
(1) 熱川温泉	
(2) 片瀬温泉	
(3) 稲取温泉の誕生（旅館経営の近代化により発展）	
(4) 北川温泉の誕生とその発展	
(5) 大川温泉の誕生	
(6) 白田温泉の誕生	
5. 観光の発展は、町の産業に大きな波及効果をもたらした	65
(1) 商業	
(2) 建設業	
(3) 製造業	
(4) つり船・観光みかん園	
(5) 海運業	
6. 商工会の誕生	69
第5節 狩野川台風災害復旧に力をそそぐ	73
1. 台風の通過経路	
2. 風向風速	
3. 降雨量	
4. 河川のはん濫決壊の状況	
5. 人的物的被害の状況	
6. 交通機関被害の状況	
7. 電灯・水道・温泉施設被害の状況	
8. 農業関係の被害状況	
9. 林業関係の被害状況	
10. 水道関係等施設の被害	
11. 公衆衛生施設関係の被害	
12. 応急対策	
13. 災害復旧	
第6節 教育	83
1. 熱川中学校「鉄筋三階建校舎」完成	83



2. 幼稚園の整備と充実	83
(1) 幼稚園の公立化と整備	
(2) 双葉幼稚園	
(3) 大川幼稚園	
(4) 熱川幼稚園	
第7節 産業・土木（農・漁業）	84
1. 東伊豆町・河津町6漁協合併新たに稲取漁業協同組合設置される	84
(1) 稲取漁業協同組合構成	
(2) 稲取漁港の沿革	
(3) 合併時及び5年毎の組合員数・漁獲高	
(4) てんぐさの年度別水揚高及び漁獲高	
2. 稲取漁港修築事業	90
3. 魚礁事業	92
4. 東伊豆町・河津町農協合併新たに伊豆東農業協同組合生まれる	94
(1) 農協のあゆみ	
(2) 旧農協の概況	
(3) 合併時及び5年毎の農家数、農家人口	
(4) 農畜産物年次別取扱高	
5. 旧城東村農村開発計画	99
6. しんせぎ	108
7. 伊豆急行鉄道駅との取合道	109
第8節 社会・福祉	110
1. 水道	110
(1) 東伊豆町水道のあゆみ	
(2) 東伊豆町水道第3次拡張・事業概要	
(3) 水道の状況	
<b>第4章 激動の10年（成長期）</b>	
第1節 概要	117
第2節 東伊豆町誕生から10周年記念式	117
1. 新町発足10周年記念式	
2. 町章について	
3. 機構改革	
第3節 伊豆大島近海地震発生～大被害をうける	120
1. 地震の発生	120

2. 被害状況	121
(1) 人および家屋の被害	
(2) 道路等の被害	
(3) 水道施設の被害	
(4) その他	
3. 救助・救援	123
(1) 災害対策本部の設置	
(2) 消防団の活動	
(3) 自衛隊、警察の活動	
(4) 各団体の活動	
4. 伊豆大島近海の地震体験記	124
第4節 相次いで集中豪雨災害をうける	134
1. 昭和50年10月災害	134
(1) 低気圧の通過状況	
(2) 降雨量	
(3) 被害の状況	
(4) 復興活動の状況	
2. 昭和51年7月災害	137
(1) 低気圧の通過状況	
(2) 降雨量	
(3) 被害の状況	
第5節 高度経済成長の波に乗り、観光は町経済の基幹となる	144
1. あらまし	144
2. なお旅館の新增築進む	144
3. 観光客の動き	146
4. 観光に対する地域住民の反応	148
5. 別荘、マンション、寮の開発始まる	149
6. リゾートマンション等	150
7. 商業	152
8. 建設業	153
9. 製造業	154
10. 伊豆大島近海の地震とその復興	155
(1) 陳情活動	
(2) 金融対策	
(3) 所得税の確定申告日の延期	



(4) その他	
第6節 教育	160
1. 教育施設の近代化と整備	160
(1) 稲取・熱川両中学校体育館完成	
(2) 熱川・稲取に小学校プール完成	
(3) 小学校新校舎建設	
(4) 給食のあゆみ	
第7節 社会・福祉	163
1. 塵芥収集	163
(1) 塵芥収集と焼却場	
(2) 焼却炉の設置	
(3) 油久保に新焼却炉完成	
(4) 厨芥処理施設	
(5) 地震に依る被害	
(6) 現施設完成	
2. 東伊豆町公営住宅	168
(1) 稲取上野団地住宅	
(2) 熱川団地	
3. 東海汽船	169
第8節 産業・土木	171
1. 片瀬土地区画整理事業	171
(1) 道路整備として	
(2) 排水路整備として	
(3) 上水道整備として	
(4) 公園整備として	
(5) 主な事業	
2. 白田海岸保全事業	178
3. 片瀬海岸保全事業(第1次)	179
4. 大川農地保全整備事業	179
5. 林道大川小溝線	180
6. 湯ヶ岡赤川線橋梁整備事業	183
第5章 明日への躍進(進展期)	
第1節 概要	185
第2節 わが町のシンボル役場庁舎完成	185

1. 東伊豆庁舎建設	185
2. 東伊豆町発足20周年記念式典	197
3. 「町の木」「町の花」の制定	197
4. 町民憲章	198
5. 岡谷市との姉妹提携の締結式	198
第3節 東伊豆町総合開発計画「基本構想」可決される	200
1. 東伊豆町総合開発計画	200
2. 町政懇談会	215
第4節 町議会・行政組織と職員数	217
1. 町議会	217
(1) 町議会のしくみ	
(2) 定例会	
(3) 臨時会	
(4) 全員協議会	
(5) 特別委員会	
2. 行政組織図と職員数	218
第5節 地方の時代と町の観光	219
1. 新たな挑戦の時期を迎えて	219
(1) 高度成長から低成長時代(地方の時代へ)	
(2) 町の各産業に不安要因が現れてきた。	
2. 地方の時代と生き抜くための方向摸索	223
(1) 経済ビジョンの作成	
(2) 地域づくり、シンポジウム開催	
(3) 産業団体連絡会の結成	
3. 温泉観光から新たな観光への胎動	229
(1) 熱川に海水浴場が生まれる	
(2) スポーツ施設の整備が進む	
(3) 観光イベント、活動も盛んとなる	
(4) 個性的な観光飲食店が生まれる	
4. 低成長時代の各産業の動き	235
(1) 旅館	
(2) ペンション、民宿の動き	
(3) 商業	
(4) 建築業	
5. 地方の時代と商工会	242



(1) 総合産業としての観光	
(2) 人づくりの対策	
6. 明日に向けて	246
第6節 教育	249
1. 大川小学校校舎完成	249
2. 稲取幼稚園、園舎完成	249
3. 静岡県立稲取高等学校新校舎完成	250
4. 東伊豆町小・中学校の沿革	251
(1) 東伊豆町立稲取小学校	
(2) 東伊豆町立熱川小学校	
(3) 東伊豆町立大川小学校	
(4) 東伊豆町立稲取中学校	
(5) 東伊豆町立熱川中学校	
(6) 東伊豆町小中学校児童・生徒・教職員数の推移	
5. 社会教育	256
(1) 審議機関・推進機関	
(2) 見るスポーツから行うスポーツへ	
(3) 青少年健全育成会の結成	
(4) 勤労者体育の振興	
(5) クロスカントリー専用コースの完成	
(6) 社会教育（文化）活動計画	
(7) 文化財保護審議会	
(8) 東伊豆町体育指導委員	
(9) 東伊豆町社会体育推進員	
(10) 社会教育（体育）活動計画	
6. 東伊豆町文化協会	274
(1) 東伊豆町文化協会の設立と経過	
(2) 文化協会グループの紹介	
(3) 郷土がるた	
7. 婦人教育	277
(1) 婦人学級	
(2) 家庭教育学級	
8. 青少年教育	280
(1) 青年教室（青年の集い）	
(2) ふるさと学級	

第7節 社会・福祉	282
1. 医療と保健	282
(1) 医療と保健	
(2) 国民健康保健	
(3) 保健事業	
(4) 伝染病予防対策	
(5) 今後の課題	
2. 尿尿の処理の沿革	288
3. 警察	288
4. 消防	289
(1) 消防組織のはじまり	
(2) 若者衆と消防組	
(3) 稲取町消防団	
(4) 東伊豆町消防団	
(5) 消防団訓練と査閲大会の成績	
(6) 常備消防設置	
(7) 防災行政無線の概要	
5. 東伊豆町の福祉のあゆみ	308
(1) 方面委員から民生委員へ	
(2) 福祉団体の発足	
(3) 社会福祉の協議会	
6. 老人福祉と老人クラブ	312
(1) 老人クラブ設立の背景	
(2) 老人クラブの誕生	
(3) 東伊豆町老人クラブ連合会の発足	
(4) 老人クラブの運営	
(5) あじさい学級	
(6) 老人スポーツ大会	
(7) 老人問題の課題	
7. 国民年金制度	322
(1) 年金の種類	
(2) 無拠出年金	
(3) 年金の給付	
8. 東伊豆町地域防災計画	327
(1) 一般対策編	



(2) 東海地震対策編	
(3) 風水害対策	
(4) 交通安全対策	
(5) 人身物損事故件数	
(6) 交通安全思想の普及及び状況	
9. 安協	334
(1) 名称	
(2) 組織	
(3) 活動内容	
(4) 交通信号機設置状況	
第8節 産業・土木	335
1. 林道白田振越線	335
2. 片瀬海岸保全事業（第3次）	335
3. 稲取灯台	336
4. 新農業構造改善事業	336
5. 一般国道135号線（白田～稲取間）の地震後の復旧	342
6. 一般国道135号線の復旧に伴う河川改修工事	343
7. 白田土地区画整理事業	344
8. 地域沿岸漁業構造改善事業	348
9. 地区林業構造改善事業	348
10. 東伊豆町稲取生活環境保全林（ふれあいの森）	353
11. 北川鮒定置網の開設と変遷	355

## 第6章 文化（風俗）

はじめに	357
第1節 神社と寺院（仏閣）	357
1. 神社	357
・八幡神社	
・三島神社	
・素盞鳴神社	
・山神社	
・赤松神社	
・志理太乎宣神社（来宮神社）	
・片菅神社	
・水神社	

・鹿島神社	
・三島神社	
2. 寺院（仏閣）	362
・正定寺	
・吉祥寺	
・善応院	
・清光院	
・済広寺	
・成就寺	
・蓮行寺	
・栄昌院	
・東泉院	
・普応寺	
・龍淵院	
・自性院	
・龍豊院	
第2節 文化財・遺跡	368
1. 県および町指定文化財	368
(1) 鹿島神宮の起源と鹿島踊りの由来	
(2) 宮後遺跡	
(3) 峠遺跡	
2. 東伊豆町埋蔵文化財包蔵地	374
・東伊豆町文化財散歩map	
3. 指定外の文化財	377
(1) 稲取の句碑	
(2) 御陣屋跡	
(3) 舩石	
(4) 稲取通称お塚について	
(5) 磯辺神社	
(6) 謎（東伊豆町西町塞の神）	
(7) 硫黄ヶ窪	
(8) 片瀬から白田に亘る要害橋と要害山及び大洞庵	
(9) 江戸城築城石と大久保岩見守	
(10) かんえ船	
(11) 生仏さま	



## ■歴代町長



第3．4代  
木村 武志  
自昭和41年 5月27日  
至昭和49年 5月26日



第5．6代  
竹内 國二  
自昭和49年 5月27日  
至昭和57年 5月26日



第7．8代  
山田大八郎  
自昭和57年 5月27日  
現在に至る



初代  
田村源一郎  
自昭和34年 5月20日  
至昭和37年 5月 8日



第2代  
鈴木 慎  
自昭和37年 5月27日  
至昭和41年 5月26日

(12) 庵の岩と行者	
(13) 植林の碑	
(14) 稲取入谷字大久保大屋のホルトの樹と熊野神社	
(15) 大ドウダンツツジ	
(16) シラヌタ大杉	
4. 旧下田街道（伊豆東浦街道）散策	391
第3節 東伊豆町各地区の年中行事	394
第4節 昔話	401
◦ ぼなり石（ぼ泣き石）	
◦ はんまあさま	
◦ 太田の大蟹	
◦ おしょうさんといたずらきつね	
◦ 狐火	
第5節 わらべうた	408
第6節 子どもの遊び道具と遊びの変遷	412
第7節 東伊豆町の方言	413
第8節 古文書	427

## 第7章 町の発展につくした人々

1. 町の発展につくした人々	435
(1) 模範村をつくった村長（田村又吉）	
(2) 伝染病とたたかう（西山五郎）	
(3) 熱川温泉の生みの親（木村彌吉）	
(4) 太田米吉	
(5) 鈴木藤吉	
(6) 太田伊之助	
2. 町功労章、有功章を授与された人々	438
(1) 東伊豆功労者表彰に関する条例	
(2) 東伊豆町有功者等の表彰規則	
(3) 叙位・叙勲を受けた人々	
・ 合併前の町のできごと（年表）	447
・ 合併後の町のできごと（年表）	468
・ あとがき	
・ 参考資料	



■歴代助役



初代  
山本 保  
自昭和34年5月12日  
至昭和57年6月20日



第2代  
八代 善次  
自昭和35年8月19日  
至昭和37年2月28日



第3代  
内山 常雄  
自昭和37年12月22日  
至昭和39年11月21日



第4. 5. 6代  
川口金次郎  
自昭和40年2月26日  
至昭和50年1月9日



第7. 8代  
太田 禾一  
自昭和50年1月10日  
至昭和56年1月13日



第9代  
渡辺 時雄  
自昭和56年1月14日  
至昭和60年2月7日



第10代  
森田 虎幸  
自昭和60年2月8日  
現在に至る



初代. 2. 3. 4代  
小林 秀彦  
自昭和34年6月24日  
至昭和48年7月31日



第5代  
笠原 英一  
自昭和48年8月1日  
至昭和53年3月31日



第6. 7代  
森田 虎幸  
自昭和53年4月1日  
至昭和60年3月31日



第8代  
鈴木 俊司  
自昭和60年4月1日  
現在に至る

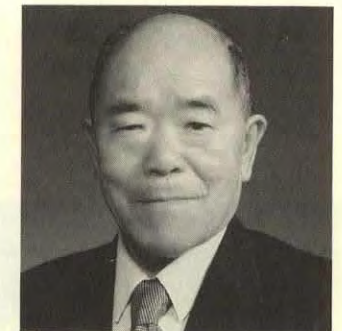
■歴代教育長



初代  
鈴木 武男  
自 昭和38年5月3日  
至 昭和38年6月9日



第2代  
吉間 久治  
自 昭和38年8月1日  
至 昭和39年6月15日



第3代  
高橋 智  
自 昭和39年7月1日  
至 昭和52年6月9日



第4代  
斎藤 長吉  
自 昭和52年7月13日  
至 昭和55年6月29日



第5代  
萩原 光一  
自 昭和55年7月16日  
至 昭和58年8月14日



第6代  
古屋 芳男  
自 昭和58年  
現在に至る



■歴代議会議長



初代  
稲葉 米吉  
昭和34年 6月10日  
就任



第2. 3. 4代  
木村 武志  
昭和36年 5月21日  
昭和38年 5月26日  
昭和40年 5月29日  
就任



第5. 10代  
大森 彦資  
昭和41年 6月16日  
昭和49年 6月14日  
就任



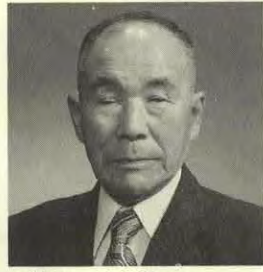
第6代  
上島新五郎  
昭和42年 5月20日  
就任



第7代  
遠藤 一重  
昭和44年 5月21日  
就任



第8代  
飯田 利作  
昭和46年 5月20日  
就任



第9. 11代  
山口 忠  
昭和48年 5月22日  
昭和50年 5月24日  
就任



第12代  
萩原 静男  
昭和52年 5月14日  
就任



第13代  
鈴木 良雄  
昭和54年 5月21日  
就任



第14代  
飯田 五郎  
昭和56年 5月20日  
就任



第15代  
田村 元  
昭和58年 5月20日  
就任



第16代  
長谷川一雄  
昭和60年 5月20日  
就任



第17代  
石井 勇  
昭和62年 5月20日  
就任

■歴代議会副議長

(年月日は就任年月日)



初代  
川口金次郎  
昭和34年 6月10日



第2代  
鈴木 吉平  
昭和36年 5月26日



第3. 4代  
大森 彦資  
昭和38年 5月21日  
昭和40年 5月29日



第5. 6代  
稲葉 恵一  
昭和41年 6月16日  
昭和42年 5月20日



第7代  
秋永 伴義  
昭和44年 5月21日



第8代  
山口 忠  
昭和46年 5月20日



第9代  
森田 輝彦  
昭和48年 5月22日



第10代  
渡辺 時雄  
昭和49年 6月14日



第11代  
前田 慶司  
昭和50年 5月24日



第12代  
飯田 五郎  
昭和52年 5月16日



第13代  
山田 儀祐  
昭和54年 5月24日



第14代  
石井 勇  
昭和56年 5月20日



第15代  
鳥澤 富雄  
昭和58年 5月20日



第16代  
石原 驍  
昭和60年 5月20日



第17代  
田村 孟夫  
昭和61年 5月24日



第18代  
片野 武  
昭和62年 5月20日



# 第 1 章



# 第1章 東伊豆町の概要

## 第1節 位置・面積・区分

### 1. 位置

東伊豆町は静岡県東部の、伊豆半島東海岸中央部に位置し、天城山系より連なる山地を背にして北部は伊東市、西部は中伊豆町、天城湯ヶ島町と接している。

また南部は河津町と接し、東は相模湾に面している。

#### 役場の位置

静岡県賀茂郡東伊豆町稲取3354番地

東経 139度2分

北緯 34度46分

### 2. 面積

#### (1) 東伊豆町の面積と位置

面積	距離			
	東	西	南	北
77.92km <sup>2</sup>	15.02km		13.78km	

#### (2) 地区別面積

区分	面積 km <sup>2</sup>
大川	19.47
奈良本	16.31
片瀬	8.16
白田	19.05
稲取	14.92 (59年14.93)
合計	77.91 ( " 77.92)

昭和56年基本構想固定資産外要調書の抜粋より)

### 3. 区分

稲取、白田、片瀬、奈良本、大川の五地区による番地を称えている。町行政の上からは、579の字町を9の自治会(区)に組織し、これを以て区長会を構成して行政の円滑化を図っている。

## 第2節 地勢・地質・土壌

### 1. 地勢

伊豆半島東海岸に位置する本町は、一般的に丘陵性をなし、北、西、南の三方を天城山系及びその支脈に囲まれ大部分は標高500m~600mの山地となっている。

河川は天城山地に水源を発する白田川が地域のほぼ中央を東下し、相模湾に注いでおり、流域に開けたわずかな平坦地に集落及び農地が散布している。

また概ね2分された、北側の地域(旧城東村)の中心部の標高は100mで南側(旧稲取町)の中心部の標高は15mとなっている。

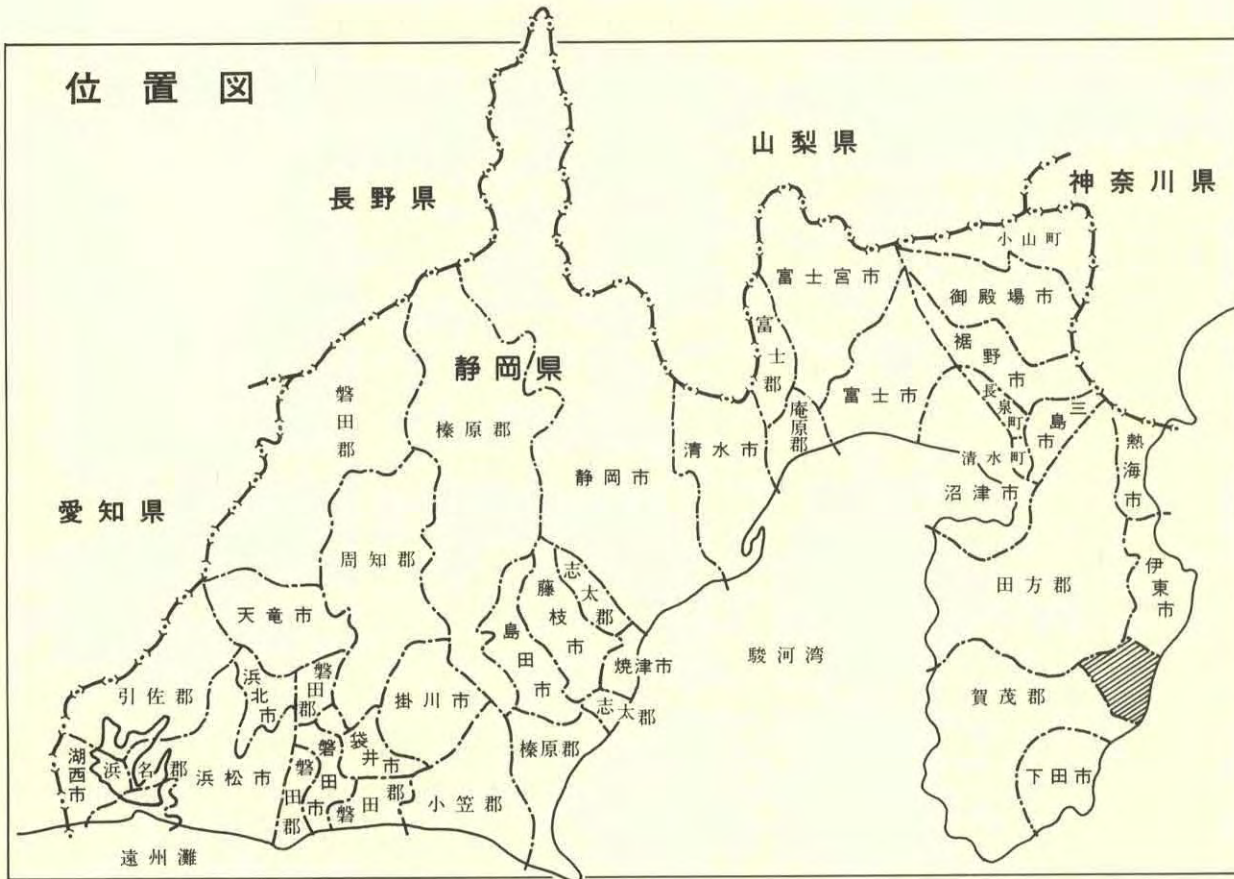
### 2. 地質、土壌

東伊豆町を構成する地質は天城山系から海岸線に至るほぼ全域を天城火山の天城火山溶岩(輝石安山岩)を基盤に前期中新世の湯が島層群とこれから貫入する輝石安山岩、石英安山岩、凝灰質砂岩から構成されている。

(1)地区別に見ると、大川、北川地区は一般的に天城火山溶岩(輝石安山岩)で



## 位置図



一部、大川集落の町道湯ノ沢草崎線より海岸線にかけて、沖積平野をつくる地層である砂礫層とに分けられる。奈良本地区においては天城山脈から箒木山を中心として、濁川から北川方面にかける海岸線まで天城火山溶岩（輝石安山岩）となっており、三井別荘地より濁川上流をへて町道湯ノ沢草崎線湯ノ沢口の西側については、火山性未固結堆積物である天城寄生火山岩滓が広範囲に広がっている。また一部町道棒田線を中心に泥砂礫互層が散布している。

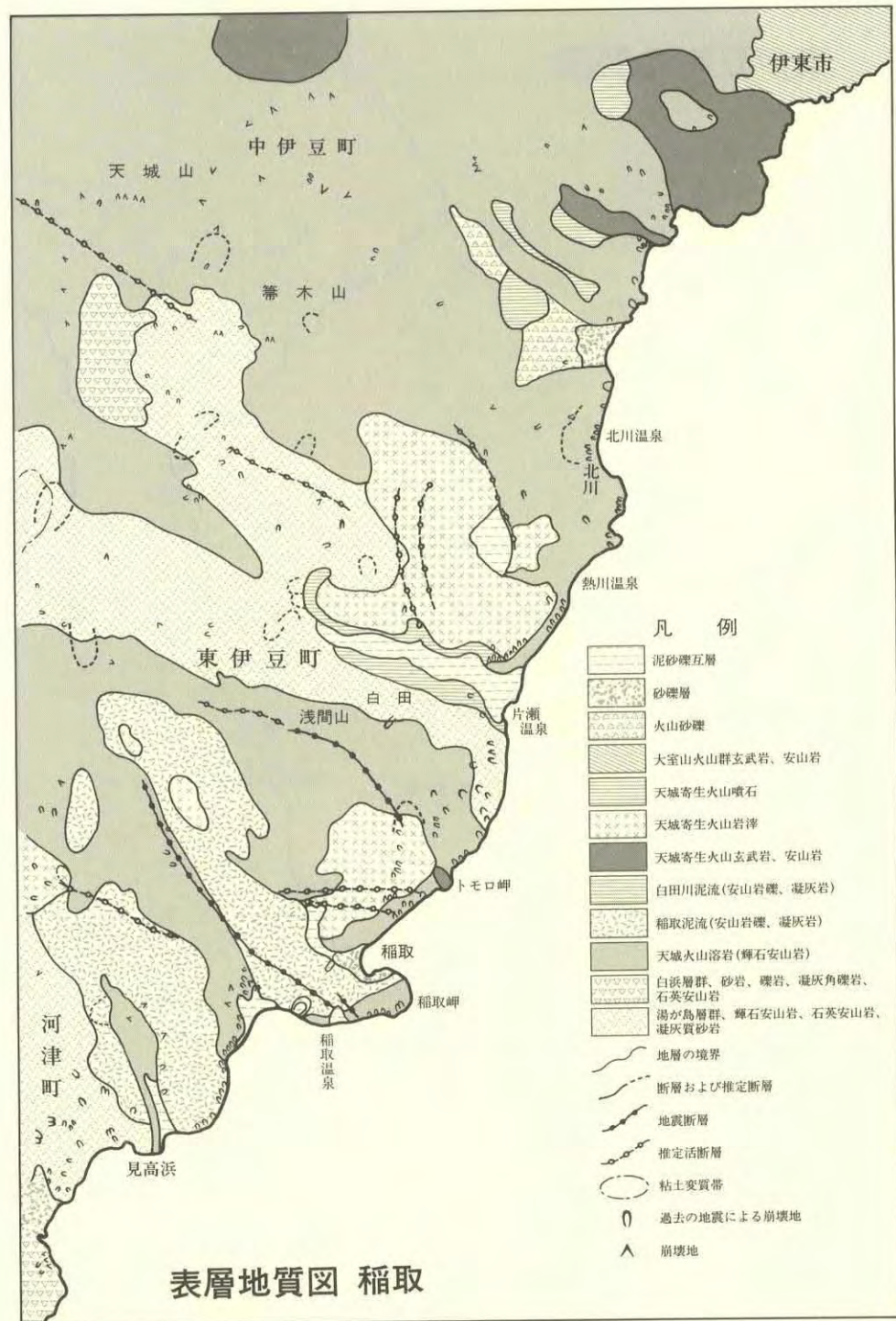
片瀬、白田地区については、白田川及び川久保川流域を中心に湯ヶ島層群とこれから貫入する安山岩、凝灰岩類、石英粗面岩、火山岩屑から構成されている。

稲取地区については、稲取ゴルフ場から志津摩川をへて海岸に至る東側に火山岩類の稲取泥流が広範囲に及んでおり、かつ東伊豆総合ランドより東側では唐沢地区まで、西側では稲取大川より中川を結んだ線で、かつ南側は135号線を結んだ線内については、天城寄生火山岩滓

## 東伊豆町地勢図







となり、これらを天城火山溶岩が囲むような形になっている。土壌は、湿潤温帯の森林植生下にみられる適潤性褐色森林土壌及び適潤性黒色森林土壌であり、暗赤色土壌、黒ボク土壌も点在している。

### 第3節 気象

#### ◎気象

気象の概要は、賀茂郡東伊豆町稲取3012番地に設置されている静岡県柑橘試験場伊豆分場の観測を基礎としている。

この地域の気候は沖合を流去する黒潮の影響によって海洋性をなし、最近5ヶ年(昭和58年から昭和62年)平均気温は15.3℃、降雨量は1949.44mmで温暖な気候である。このような気候、気象条件は植物の生育に適し、温帯系の広葉樹や針葉樹はもちろん、亜熱帯の植物も自生しているなど、冬でも無霜地帯で自生の生産力は高い。

#### 1. 気温 (昭和62年)

気温は平均気温で1月は7度、8月は26度で年平均気温は16.1度となっていて、温暖且つ夏冬の気温の差が少なく、人間の生活に適しているばかりではなく、植物の生育にも適している。

#### 2. 風

風は春から夏にかけては南、及び北東の風が主風をなし、秋から冬にかけて北西の風が比較的強く吹く。

#### 3. 降水量

年間降雨量(昭和62年)は2296mmで、一般的には2000~2500mm程度と言われている。気候的には恵まれているが、反面、梅雨期と台風襲来期には300mmを越える降雨もあり、がけ崩れ等の災害もしばしば発生している。



年度別気温調べ

(資料：柑橘試験所)

年	最高気温の平均(℃)	最低気温の平均(℃)	平均気温(℃)	降雨量(mm)	備考
34	20.6	13.1	16.9	3,190.3	
35	20.4	12.8	16.6	2,374.1	
36	20.5	13.3	16.9	2,443.7	
37	19.7	12.5	16.1	2,626.4	
38	19.1	12.4	15.8	2,783.5	
39	19.4	13.0	16.2	2,440.8	
40	19.4	12.1	15.8	2,497.0	
41	19.3	12.9	16.1	2,638.4	
42	19.1	13.2	16.2	2,149.7	
43	18.9	12.8	15.9	2,869.7	
44	19.6	12.6	16.1	2,495.1	
45	19.1	12.5	15.8	2,529.6	
46	19.3	12.6	16.0	2,031.7	
47	19.9	13.2	16.6	2,937.0	
48	19.6	12.8	16.2	2,142.2	
49	19.0	12.5	15.8	2,584.7	
50	19.3	12.7	16.0	2,815.1	
51	19.1	12.3	15.7	3,316.4	
52	19.3	12.7	16.0	2,302.1	
53	19.4	12.8	16.1	1,940.7	
54	20.2	13.1	16.7	2,455.1	
55	18.6	12.1	15.4	2,567.6	
56	17.7	11.4	14.6	1,765.0	
57	17.7	11.7	14.7	2,611.0	
58	17.6	11.7	14.7	2,656.2	
59	17.8	12.1	15.0	1,178.0	
60	18.6	12.6	15.6	1,902.0	
61	18.1	12.1	15.1	1,715.0	
62	19.1	13.0	16.1	2,296.0	

昭和62年度月別気温調べ

(資料：柑橘試験所)

区 分	1月	2月	3月	4月	5月	6月
最高気温の平均(℃)	10.3	10.3	12.8	16.8	21.6	23.4
最低気温の平均(℃)	3.6	3.8	6.1	10.1	14.7	17.9
平均気温(℃)	7.0	7.1	9.5	13.5	18.2	20.7
降雨量(mm)	109.0	53.0	335.0	102.0	341.0	209.0
区 分	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高気温の平均(℃)	28.2	29.0	25.0	21.3	16.6	13.1
最低気温の平均(℃)	22.7	23.0	19.9	16.1	10.9	6.9
平均気温(℃)	25.5	26.0	22.5	18.7	13.8	10.0
降雨量(mm)	358.0	162.0	288.0	192.0	95.0	52.0
区 分	年平均					
最高気温の平均(℃)	19.1					
最低気温の平均(℃)	13.0					
平均気温(℃)	16.1					
降雨量(mm)	2,296.0	(合計)				



## 第4節 人口

東伊豆町発足当時の人口は15246人であったが、近年観光産業の発展とともに、年率4～5%程度の増加をし昭和50年には17324人となったが、昭和53年に発生した伊豆大島近海地震は、町の基幹産業である観光に大きな影響を与え、それ以降年々減少を続け、昭和55年には17030人となったが、現在は横ばい状態にある。

世帯数は合併当時3146世帯で1世帯当たり4.8人であったが昭和60年の国勢調査では、5585世帯となり、1世帯当たり3.0人で核家族化が進んでいる。

## 1. 人口・世帯推移

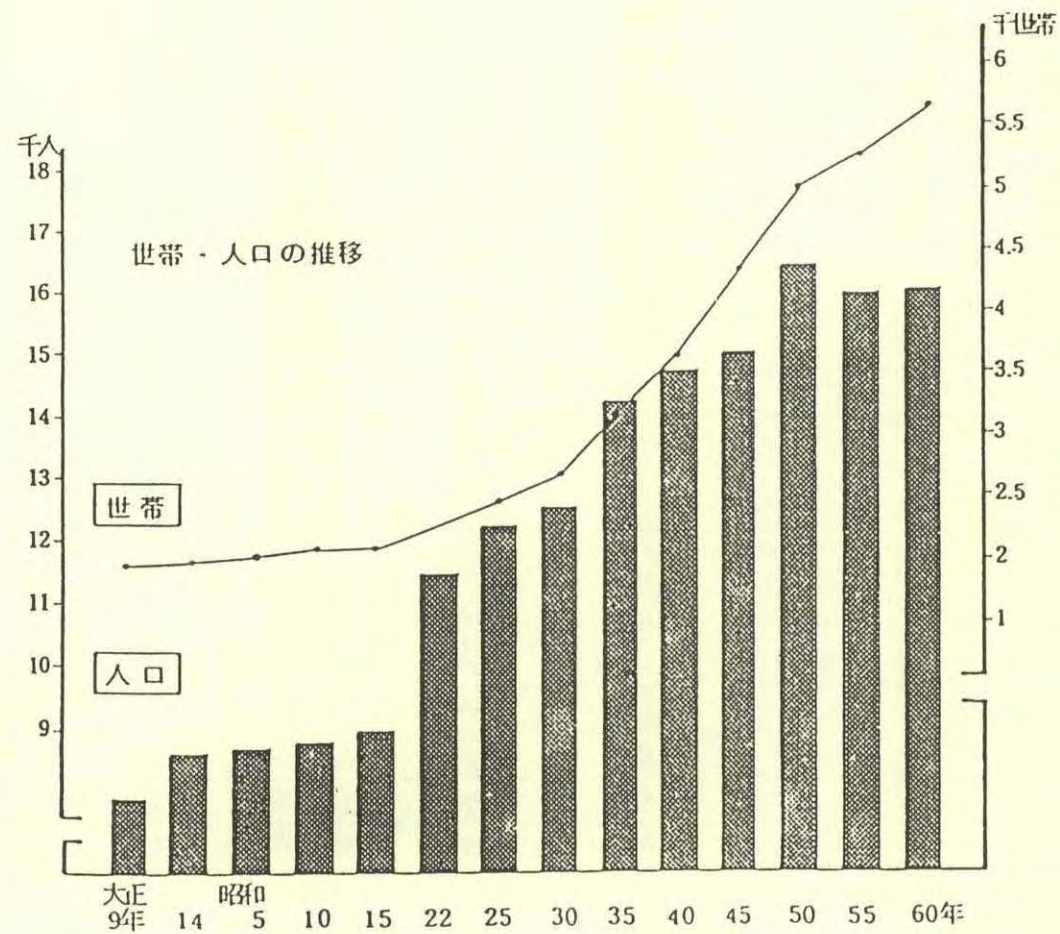
単位：世帯・人

年別	区分	世帯数	人			一世帯 平均人員
			男	女	計	
明治9年		1,185	3,035	2,972	6,007	5.1
18		1,252	3,279	3,253	6,532	5.2
22		1,316	3,487	3,418	6,905	5.2
30		1,403	3,861	3,880	7,741	5.5
32		1,413	3,915	3,936	7,851	5.6
42		1,471	4,316	4,286	8,605	5.8
大正1年		1,531	4,457	4,435	8,892	5.8
9		1,792	4,456	4,416	8,872	5.0
14		1,930	4,952	4,640	9,592	5.0
昭和5年		1,987	4,916	4,834	9,750	4.9
10		2,061	4,928	5,002	9,930	4.8
15		2,061	5,018	5,100	10,118	4.9
22		調査なし	6,100	6,559	12,659	—
25		2,447	6,508	6,802	13,310	5.4
30		2,667	6,623	7,046	13,669	5.1
35		3,146	7,865	7,381	15,246	4.8
40		3,669	7,621	8,176	15,797	4.3
45		4,348	7,608	8,612	16,220	3.7
50		5,001	8,225	9,099	17,324	3.5
55		5,284	8,148	8,882	17,030	3.2
60		5,585	8,099	8,934	17,033	3.0

資料：国勢調査

\* 昭和34年5月3日、稲取町と城東村が合併し東伊豆町に。  
それ以前は、稲取町と城東村との合計です。





## 2. 人口動態

### (1) 自然動態

単位：人

区分\年	S46年	47	48	49	50	51	52	53
出生	299	309	292	322	269	250	218	250
死亡	110	121	143	123	121	109	127	124
増減(A)	189	188	149	199	148	141	91	126

	54	55	56	57	58	59	60	61
	233	207	215	172	154	200	169	140
	110	120	128	124	130	157	138	107
	123	87	87	48	24	43	31	33

(各年4月1日～3月31日)

### (2) 社会動態

区分\年	S46年	47	48	49	50	51	52	53
転入	1,483	1,582	1,525	1,640	1,186	1,219	1,128	1,177
転出	1,502	1,498	1,663	1,461	1,334	1,311	1,364	1,128
増減(B)	△ 19	84	△ 138	179	△ 148	△ 92	△ 236	49
(A)+(B)	170	272	11	378	0	49	△ 145	175

	54	55	56	57	58	59	60	61
	937	1,028	921	1,058	934	1,071	913	946
	1,159	1,149	1,142	1,088	1,024	1,223	962	932
	△ 222	△ 121	△ 221	△ 30	△ 90	△ 152	△ 49	14
	△ 99	△ 34	△ 134	18	△ 66	△ 109	△ 18	47

(各年4月1日～3月31日)

### (3) 婚姻・離婚(戸籍受理件数)

単位：件

区分\年	昭和46	47	48	49	50	51	52	53
婚姻	352	381	412	352	338	301	284	264
離婚	34	44	35	49	47	37	43	39

	54	55	56	57	58	59	60	61
	167	256	250	211	233	205	244	213
	25	34	48	46	52	42	48	39

(各年4月1日～3月31日)



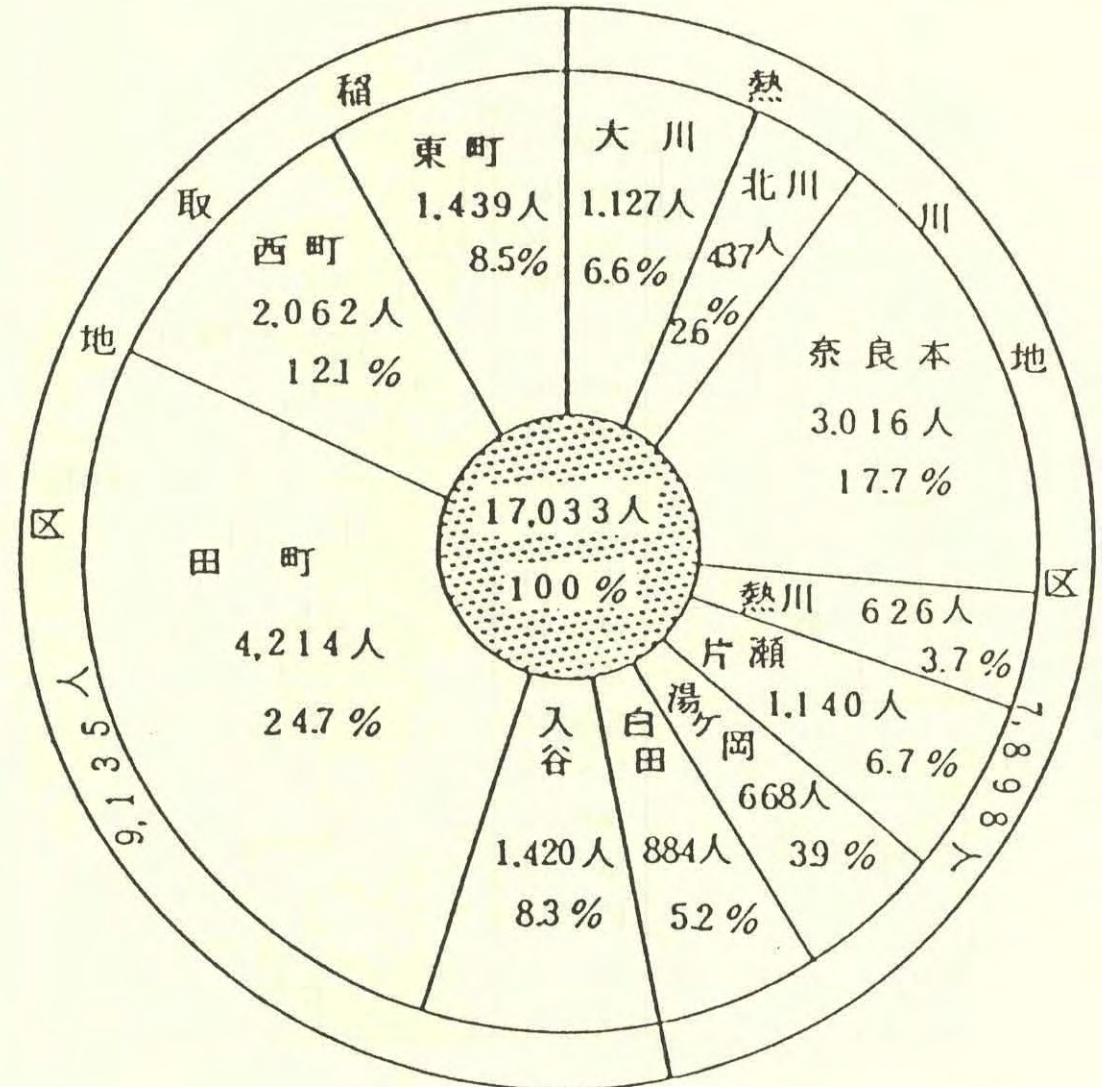
### 3. 地区別人口世帯数の推移

(1) 国勢調査地区別人口の推移 (11地区)

単位：人・世帯

地区	年		昭和40	45	50	55	60
	世帯	人口					
大川	人口		977	1,030	1,194	1,142	1,127
	世帯数		202	256	349	335	327
北川	人口		548	567	554	435	437
	世帯数		133	170	177	157	167
奈良本	人口		2,137	2,335	2,943	2,962	3,016
	世帯数		570	679	876	994	1,061
熱川	人口		959	884	763	696	626
	世帯数		150	195	245	282	289
片瀬	人口		1,228	1,176	1,163	1,166	1,140
	世帯数		301	311	326	367	392
湯ヶ岡	人口		699	705	769	683	668
	世帯数		156	172	183	181	180
白田浜	人口		949	890	844	879	884
	世帯数		219	242	241	242	286
入谷	人口		1,223	1,288	1,160	1,456	1,420
	世帯数		238	306	304	410	418
田町	人口		3,226	3,506	4,417	4,241	4,214
	世帯数		776	978	1,245	1,277	1,324
西町	人口		1,739	2,140	1,914	1,851	1,062
	世帯数		450	614	599	596	740
東町	人口		2,072	1,669	1,603	1,519	1,439
	世帯数		471	425	426	410	402
合計	人口		15,797	16,220	17,324	17,030	17,033
	世帯数		3,666	4,348	5,001	5,251	5,585

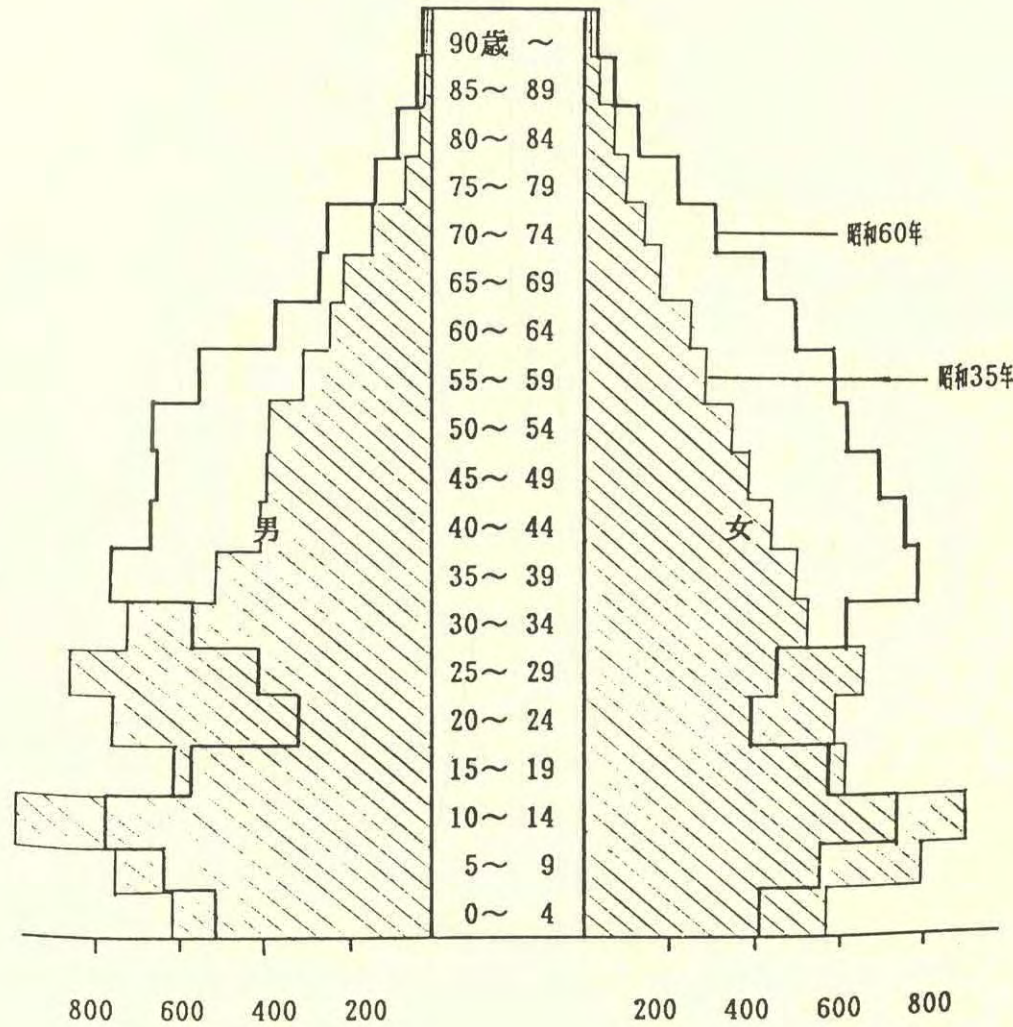
(2) 地区別・人口割合 (昭和60年国勢調査)





4. 年齢別人口構成図

(国勢調査  
昭和53年10月1日  
昭和60年10月1日)



5. 就業者人口

産業（大分類）別就業者数の推移

単位：人

年次	町村	就業者数	第1次産業				第2次産業		
			農業	林業	漁業 水産業	計	鉱業	建設業	製造業
昭和25年	稲取町	2,905	928	20	以下不明				
	城東町	2,427	1,418	169	"				
	計	5,332	2,346	189	"				
昭和30年	稲取町	3,151	814	13	"				
	城東町	2,817	1,357	206	"				
	計	5,968	2,171	219	"				
昭和35年	東伊豆町	7,615	1,925	93	540	2,558	14	1,835	218
昭和40年	"	8,245	1,807	56	471	2,334	17	1,138	206
昭和45年	"	8,689	1,502	28	318	1,848	8	974	245
昭和50年	"	8,586	1,085	21	214	1,320	2	1,062	255
昭和55年	"	8,636	1,002	27	193	1,222	0	1,050	192
昭和60年	"	8,969	900	19	176	1,095	26	1,035	291

計	第3次産業							分類不能	
	電気・道 ガス業	運輸・通信業	卸・小食 売店	金融・保険業	不動産業	サービス業	公務		
2,067	37	475	805	60	1,535	68	2,980	10	
1,361	29	615	1,008	105	2,708	83	4,548	2	
1,227	46	568	1,303	95	46	3,449	107	5,614	0
1,319	44	508	1,404	108	61	3,680	126	5,931	16
1,242	44	455	1,613	115	47	3,757	138	6,169	3
1,352	40	406	1,521	128	63	4,194	157	6,509	13

資料：国勢調査

各年10月1日



6. 流動人口

(1) 流出人口

単位：人

区分 通勤・通学地	東伊豆町から他市町村へ					
	55年			60年		
	総数	通勤	通学	総数	通勤	通学
通勤・通学合計	1,165	916	249	1,479	1,100	379
東伊豆町から流出（県内）計	1,020	772	248	1,315	977	338
伊東市へ	411	372	39	540	468	72
下田市へ	399	204	195	494	254	240
河津町へ	124	123	1	137	137	0
熱海市へ	44	42	2	56	52	4
沼津市へ	11	8	3	29	20	9
三島市へ	8	2	6	14	11	3
南伊豆町へ	6	6	0	5	4	1
松崎町へ	0	0	0	4	4	0
西伊豆町へ	3	3	0	4	4	0
賀茂村へ	0	0	0	0	0	0
その他の県内へ	14	12	2	32	23	9
東伊豆町から流出（県外）計	145	144	1	164	123	41
東京都へ	65	65	0	53	48	5
神奈川県へ	63	62	1	41	39	2
その他の県へ	17	17	0	70	36	34

資料：国勢調査

各年10月1日

(2) 流入人口

単位：人

区分 常住地	他市町村から東伊豆町へ					
	55年			60年		
	総数	通勤	通学	総数	通勤	通学
通勤・通学合計	1,240	948	292	1,253	993	260
東伊豆町へ流入（県内）計	1,167	877	290	1,253	993	260
伊東市から	279	259	20	282	269	13
下田市から	310	207	103	323	213	110
熱海市から	25	25	—	29	29	0
河津町から	464	305	159	568	436	132
南伊豆町から	35	30	5	25	20	5
松崎町から	11	11	0	21	21	0
その他の県内から	43	40	3	5	5	—
東伊豆町へ流入（県外）計	73	71	2	—	—	—
東京都から	26	26	0	—	—	—
神奈川県から	19	19	0	—	—	—
その他の県外から	28	26	2	—	—	—

資料：国勢調査

各年10月1日

※流入人口については上記以外については不明



## 第5節 交通

東伊豆町の交通を道路網からみると県道として旧稲取町の中心部を南北に縦断する県道稲取港線、また海岸線沿いに県道熱川片瀬線があり、国道135号線と接続している。この他、奈良本と大川を結ぶ、町道湯ノ沢草崎線が連絡しており、広域生活圏道路として基幹的な役割を果たしており、町内外地域との動脈となっている。

地域の交通は、主として鉄道の伊豆急行と国道及び県道を定期バスが運行しており生活圏道路として重要な役割を果たしている。

京浜地方（東京）までの所要時間は2時間30分から3時間で、生活物資の搬入出は鉄道及びトラック輸送で行われており、主として大型車の交通可能な国道135号線が利用されている。





## 第6節 植物・動物

### 1. 植物

植物の分布は、気候・地形・地質など、さまざまな環境の影響を受けている。海岸線の年平均気温は16℃、最高峰の万三郎岳（1406m）ではこれより8℃低いといわれている。また天城山系を中心とする山々は、豊かな雨に恵まれ、深い谷は多くの植物をはぐくむ場所となっている。

町全体では、温帯から温帯性の植物が分布しているが、火山作用の影響で変成して生じた植物も分布し、また海岸の環境に適応したと思われる特有の植物もある。

#### (1) 照葉樹（標高0～800m）

海岸から標高800m付近までが常緑広葉樹の優占する地域で、常緑広葉樹は、一年中緑の葉をつけ、葉はやや小型で厚く、光沢があるので、照葉樹とも呼ばれている。

主な群落の構成種は、高木ではスジダ

イ、タブノキ、ヤマモモ、カシ類などが優占し、亜高木や低木ではヤブツバキ、ヤブニッケイ、ヒサカキ、シロダモ、アオキなどまた林床には、イタチシダ類、ベニシダ類、カナワラビ類、イノデ類などのシダ類が多く生育している。主な種ではホソバノカナワラビ、ベニシダ、フモトシダ、コバノカナワラビなどがあげられる。

またつる植物も多くテイカカズラ、フウトウカズラ、キズタなどが主な種である。

#### ①ヤブコウジースジダイ群落

沿岸域のやや湿った斜面や尾根筋では、スジダイの優占した群落になり、ヤブツバキ、シロダモ、ヒサカキ、マンリョウなどが目だつ。

#### ②イノデータブノキ群落

沿岸域の土壌の厚い谷筋など、やや湿性な立地は、タブノキ林となっている。高木にタブノキ、林床には、イノデ、コバノカナワラビ、ヘラシダなどが目だつ。

#### ③クロマツ群落

沿岸には、高木林としてクロマツ林が

発達している。クロマツ林内にはトベラ、ヒメユズリハ、ヤマモモ、ウバメガシなどが亜高木層、低木層を占めていて、クロマツを高木層に持つ照葉林という感がある。

#### ④サカキーアラカシ群落

内陸ではウラジロガシ、ツクバネガシ、アラカシ、アカガシなどの優占するカシ林が観察できる。

#### ⑤モミーシキミ群落

標高800m前後の照葉林と夏緑林域の境界附近には、高木層にモミ、ツガ、アカガシなどの優占した群落が見られ、低木層にはシキミ、カヤ、アセビなどが目だつ。このモミ林は、尾根筋や岩や礫の多い養分の乏しい立地に発達している。

#### (2) 夏緑林（標高800m～1400m）

①標高800m以上に夏緑林がみられる。とくに天城山（万二郎岳1325m、万三郎1406m）の山頂部附近にはブナ、ヒメシャラ、ミズナラの優占する自然林が残されている。これらの森は、夏に茂り、冬に一斉に葉を落とし休眠するため落葉広葉樹林とも呼ばれている。立地の違いにより、いくつかの群落に分けられる。

#### ②ツクバネウツギーブナ群落

この群落は風下側のやや緩斜面で土壌の厚い立地によく発達している。ブナなどの高木は10mを越え、林床にはスズタケが一面に生え、タンナサワフタギ、クロモジ、ツクバネウツギなどが多く見ら

れる。この群落は太平洋側のブナ林を代表する一つである。

#### ③アセビーイヌツゲ群落

尾根筋などの風当たりの強い立地ではアセビ、ヒメシャラ、リョウブイヌツゲ、アマギツツジ、サラサドウダンなど木本類の多い亜高木林、低木林が発達している。この群落は乾燥したやせ土地に見られ、冬には西風を強く受けるため、林冠は密で、刈り取られたように平らにそろった高さ4から5mほどの群落が見られる。

#### (3) 海岸沿いの群落

海岸は、岩石海岸と砂浜海岸とに区分されるが、それぞれ最前線から内部の陸に向かって一年草・多年草、低木、高木の群落の配列が見られる。

#### ①海岸の群落

当町に於いては海崖の占める面積が広いのが特徴である。海に面したこの磯には、地形が急峻なため自然植生がよく残されている。磯は吹きつける風と潮の飛沫の影響が強く、岩ばかりで土壌は少なく、植物にとって厳しい環境である。波打ち際には、一年草の群落が発達し、その後方に多年草、低木群落と続いている。

#### ②ハマツメクサ群落

岩石海岸の最前線にはハマツメクサ、ハマエノコログサ、タイトゴメなど1年草を主にした群落が観察できる。

#### ③イソギク群落

伊豆半島地域の気候帯と植生帯の区分

気候帯	垂直分布帯	相観による植生帯	優占種による植生帯
温帯	山地帯 (800～1407m)	夏緑広樹林帯	ブナーミズナラ帯
暖帯	低地帯 (0～800m)	照葉樹林帯	シイーカシ帯



一年草群落の後方にはイソギクを主とした多年草の群落が見られる。イソギクのほか、アゼトウナハチジョウススキ、ポタンボウフウ、ハマナデシコなどが混生した草原となっている。

#### (4) 森林周辺の群落

森林の縁には低木やつる植物からなる藪が見られる。藪を構成する群落はマント群落と呼ばれ、森林内に直接光や風が入り込むのを防ぎ、森林内の環境を一定に保つ役割を果たしている。主な種類をあげるとクサギ、アカメガシワ、タラノキ、クズ、ノイバラ、ノブドウなどである。群落の外側には、肥沃な環境を好む多年草の群落が線状に見られ、スソ群落と呼ばれている。イタドリ、ヨモギ、イノコズチ、キンミズヒキなどが生えている。

#### ◎シダ植物

伊豆には360種類余りのシダ植物が自生し、静岡県に自生する450種類の80%を占め、屋久島・尾鷲とともに、日本のシダ植物の三大宝庫の一つに数えられている。天城山中は年間雨量が300mmを超え、シダの生育に適した条件を作りだしている。また暖地で特に冬季の気温が高く、当町に於いても無霜地区があるほどである。このため暖地性の種類も生育できる。土地条件では、広大な国有林があることと、山が海に迫り、東西に走る河川や溪谷に恵まれていることがあげられ

る。

このようなさまざまな環境条件が多く、シダの生育に適しているため、この地域で種類による住み分けがみられる。天城山系の海拔800~1000mの地域は気候的には温帯であるが北方系のオオバシヨリマ、ミヤマイタチシダ、フジシダ、ミヤマワラビなど40種類ほどが生育している。それ以下の標高の地域は暖帯に属し、南方系のユノミネシダ、シロヤマゼンマイ、インカグマ、ケホシダ、テツホシダ、リュウビンタイなど多くの種類が生育している。特に注目したいのは、日本列島を北上してきた南方系の種類が伊豆を北限または東限としていることで、それらにはノコギリヘランシダ、ヒロハヒメウラボシ、サイゴクホングウシダ、ニセコクモウクジャク、セイタカイワヒメワラビなど36種類ほどが知られている。

また、伊豆産のシダには、伊豆の地名や文学に因んだ和名のものもある。アマギシダ（天城）、イズコモチシダ（伊豆）、ジョウレンシダ（浄蓮の滝）、カワズカナワラビ（河津）、シモダヌリトラノオ（下田）、オドリコカグマ（伊豆の踊り子）などがある。

## 2. 動物

### (1) 哺乳類

伊豆半島は平野部が少なく、部落の裏まで山がせまってきたので、多くの野生哺乳類が人家周辺まで姿を見せる。

人家周辺ではアカネズミやハツカネズミ、ジネズミが姿を見せ、タヌキやハクビシンの庭や畑に出てくる。少し足を伸ばして山の中へ入ると、ハタネズミ、ヒメネズミやスミスネズミ、ヒミズなどのネズミ・モグラ類やサル、シカ、イノシシなどが生息している。

### (2) 鳥類

伊豆半島では、ウミネコ、カモメ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、セグロカモメなどのカモメ類や、ゴイサギ、コサギ、クロサギ類が特に秋から冬にかけて数多く集まる。当町附近ではユリカモメ、ウミネコなどが確認されているが、2月中旬になると北の方への移動を開始する。またこのような海鳥ばかりでなく、特に天城山系は山地性の鳥の宝庫となっている。標高は1400m程度であるので、亜高山系の鳥は稀だが、初夏にはコマドリ、オオルリ、キビタキ、コルリなどの夏鳥や、ミソサザイなどが美しいさえずりで楽しませてくれる。また今では貴重な鳥のひとつになってしまった「火の鳥」アカシヨウビンも稀に観察できる。何年か前には珍鳥シマクイナが天城道路付近に落ちているのが発見されたこともある。

### (3) 昆虫類

まず蝶類では、特に暖地性のモンキアゲハが多く、この蝶は稲取方面に多く見られる。梅雨明けのころハマオモトの花に集まる情景は南伊豆の自然を象徴して

いるかのようなのである。ミヤマカラスアゲハは八丁池附近など天城山系の高地帯に多くキハダ（ミカン科）に発生しているものとみられる。

シロチョウ科では、モンシロチョウの発生する耕作地を通り過ぎて山麓地帯まで足をのぼすと、春先にはツマキチョウを、春から秋にかけてはスジグロシロチョウを見ることができる。ムラサキシジミは伊豆半島を代表する蝶の一つで、照葉樹のアラカンに発生する。天城山系の深い谷にはキリシマミドリシジミがすんでおり、幼虫はアカガシの新芽を食べて育つ。天城山系の高地帯の夏緑林にはフジミドリシジミやメスアカミドリシジミが見られ、前者はブナを後者はサクラ類を食樹している。

蛾類では、海岸地帯でハマオモトを食べるハマオモトヨトウ、ウバメガシを食べるクロシオキシタバなど暖地性の種類の分布がよく知られている。

甲虫類では、おもに天城山などで調査が行われているが、とくに暖地性の種類に興味のあるものが見られる。カミキリムシ科では、山地のカエデの花から、ビクニセハムシ、ハナカミキリ、ヘリウスハナカミキリ、カエデノヘリグロハナカミキリ、ヒラヤマコブハナカミキリなどが知られ、そのほかタキグチモゴトハナカミキリ、クモノスモンサカミキリなど注目すべき種類も記録されている。



伊豆周辺の特産種としてコトヒメハナカミキリ、アマギカラカネハナカミキリ、アマギキベリクロヒメカミキリが知られている。他の甲虫類では、特にゴミムシ科、ゴミムシダマシ科、ナガクチキムシ科などに興味深い種類が多く含まれている。

伊豆半島は急流河川が多く、池沼や湿地に乏しいため、トンボ類は必ずしも豊富とはいえないが、分布上注目される種類もいくつか見ることができる。天城山の八丁池には、寒地性のオオルリボシヤンマが多産したという記録がある。また地質が比較的新しい天城山の周辺部でムカントンボが記録されていることは注目に値する。アオハダトンボの産地が多いことも伊豆半島の特徴である。伊豆地方全域に広く見られるカワトンボは「ヒガシカワトンボ」と考えられているが、このカワトンボは全国的にみても独特なタイプに属している。

#### (4) 爬虫類・両生類

##### ①爬虫類

伊豆地域に普通に分布している爬虫類は、カメの仲間ではクサガメとイシガメ、トカゲの仲間ではヤモリ、トカゲ、カナヘビ、ヘビの仲間ではタカチホヘビ、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シロマダカ、マムシ、ヒバカリである。ヒバカリは低山地の林の中などに生息しており、特に水辺や湿った場所を好み、カ

エルやオタマジャクシ、ミミズ、魚などを食べる。ヒバカリという名は、このヘビにからまれると、その“日ばかり”しか命がもたないという迷信からつけられたといわれている。しかし実際は全く無毒で、しかも性質がおとなしく、かみつくことはほとんどない。

##### ②両生類

伊豆地域の両生類の分布で、生息している種類は、カエルの仲間ではアマガエル、ヒキガエル、タゴガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエル、モリアオガエル、カジカガエルである。またサンショウオの仲間ではハコネサンショウオとイモリがある。

モリアオガエルは樹上性の比較的大型のカエルで、山間部に多く生息している。珍しい産卵習性によって有名で、樹上に泡でできた卵塊を産む。シラヌタの池はこのモリアオガエルの生息地として知られている。

##### (5) 磯の動物

伊豆地方海域には、アカガイ、イセエビ、ブリなどの暖流（黒潮）系の生物が多いが、アサガオクラゲ、スルメイカ、ヒラメなど寒流（親潮）系の生物も混じっている。さらに、ラッパウニ、チョウチョウオなど亜熱帯性の生物、サムクラゲ・サンマなど亜熱帯性の生物やカ

ツオノエボシ（電気クラゲ）・ルリハタなどの熱帯性の生物も見られ、種類数では世界有数の海域になっている。生命のふるさとである海は、現在もなお、陸上と比べものにならない多様な種類の生物をはぐくんでいる。潮だまりのまわりの岩の上には、丸っこい巻貝のタマキビがビッシリとついている。皿のように変形した巻貝のカサガイ類やエビ・カニの親せきとは思えないフジツボやカメノテも豊富である。固い肉質の体の上にも何枚かの板状の殻を並べたヒザラガイも、岩にピッタリついている。これらの動物は潮があげた時だけ、海水中の微少な生物などを食べている。潮だまりの中に目を移すと、さらに種類は増え、細かな刻み模様をもつイシダタミ、料理店で「シッタカ」として売られているクマノコガイ・バテイラなどの巻貝が岩や海藻にかくれるようにして生活している。澄んだ水の潮だまりには、貝をもたない巻貝であるウミウシ類も見つけることができる。イソスジエビやイソガニ、イソクズガニ、それにヤドカリなどエビやカニの仲間は潮だまりのスピード・ランナーといえる。この他アゴハゼなどの仲間が鳥が空を飛ぶように泳いでいる。また動物とは思えない姿をしたカイメンやイソギンチャク、円盤のようなウニやヒトデの仲間も岩にとりついて静かに生きているようすが見られる。

##### (6) 陸淡水産貝類

天城山ではオオヤマベニコマガイ、ヤマメタニシなど他では見られない種がすんでいる。シモダマイマイ、ヒラマイマイ、ハコネマイマイ、ニッポンマイマイ、キヌビロウドマイマイなどの種類が多くヤマダニシは落葉の下にすんでおり、川にはカワニナ、モノアラガイ、場所によってはマメシジミの1種がみられる。

（資料「ふるさとの自然（伊豆編）静岡県自然保護協会編）



第7節 歴代町長、助役、収入役、教育長、町議会議員、副議長  
および選挙の状況

1. 歴代町長

代位	氏名	就任年月日
1	田村源一郎	昭和34年5月20日
2	鈴木慎	37年5月27日
3	木村武志	41年5月27日
4	木村武志	45年5月27日
5	竹内國二	49年5月27日
6	竹内國二	53年5月27日
7	山田大八郎	57年5月27日
8	山田大八郎	61年5月27日

2. 歴代助役

代位	氏名	就任年月日
1	山本保	昭和34年7月12日
2	八代善次	35年8月19日
3	内山常雄	37年12月22日
4	川口金次郎	40年2月26日
5	川口金次郎	44年2月27日
6	川口金次郎	48年2月27日
7	太田禾一	50年1月10日
8	太田禾一	54年1月10日
9	渡辺時雄	56年1月14日
10	森田虎幸	60年2月8日

3. 歴代収入役

代位	氏名	就任年月日
1	小林秀彦	昭和34年6月24日
2	小林秀彦	38年7月27日

3	小林秀彦	昭和42年8月9日
4	小林秀彦	46年8月9日
5	笠原英一	48年8月1日
6	森田虎幸	53年4月1日
7	森田虎幸	57年4月1日
8	鈴木俊司	60年4月1日

4. 歴代教育長

代位	氏名	就任年月日
1	鈴木武男	昭和38年5月3日
2	吉間久治	38年8月1日
3	高橋智	39年7月1日
4	斎藤長吉	52年7月13日
5	萩原光一	55年7月16日
6	古屋芳男	58年9月1日

5. 歴代議長・副議長

代	氏名	就任月日	代	氏名	就任月日
1	稲葉米吉	昭和34. 6. 10	1	川口金次郎	昭和34. 6. 10
2	木村武志	36. 5. 21	2	鈴木吉平	36. 5. 26
3	木村武志	38. 5. 26	3	大森彦資	38. 5. 21
4	木村武志	40. 5. 29	4	大森彦資	40. 5. 29
5	大森彦資	41. 6. 16	5	稲葉恵一	41. 6. 16
6	上島新五郎	42. 5. 20	6	稲葉恵一	42. 5. 20
7	遠藤一重	44. 5. 21	7	秋永伴義	44. 5. 21
8	飯田利作	46. 5. 20	8	山口忠	46. 5. 20
9	山口忠	48. 5. 22	9	森田輝彦	48. 5. 22
10	大森彦資	49. 6. 14	10	渡辺時雄	49. 6. 14
11	山口忠	50. 5. 24	11	前田慶司	50. 5. 24
12	萩原静男	52. 5. 16	12	飯田五郎	52. 5. 16
13	鈴木良雄	54. 5. 21	13	山田儀祐	54. 5. 24
14	飯田五郎	56. 5. 20	14	石井勇	56. 5. 20



15	田村 元	58. 5. 20	15	鳥沢 富雄	58. 5. 20
16	長谷川一雄	62. 5. 20	16	石原 驍	61. 5. 24
17	石井 勇	62. 5. 20	17	田村 孟夫	61. 5. 24
			18	片野 武	62. 5. 20

資料：議会事務局

## 6. 歴代町議会議員

### ●合併前

(稲取町)	上嶋 長蔵	村木 連	鈴木 吉平	川口金次郎
	山下 常夫	竹内 國二	大森 彦資	中村 玉助
	太田 鉄蔵	山田 光男	村木宇佐 <sub>ニ</sub> 門	八代 由太
	山村吉五郎	鈴木 慎	太田伊之助	田代孝太郎
	鈴木芳五郎	川口 元吉	広瀬 重利	山崎助太郎
	渡辺 長松			
(城東村)	稲葉 米吉	木村 武志	野沢繁右 <sub>ニ</sub> 門	坂田穂三郎
	加藤 清	土屋豊太郎	土屋照治郎	飯田 利作
	常盤 寿平	前田 理	小沢 寛	秋永 能雄
	向田 行輝	高羽太一郎	渡辺為治郎	土屋 友吉
	森田 直徳	飯田 吾郎	稲葉 幸三	太田 正三
	高橋 良雄	稲葉 恵一		

### ●昭和34年 5月

大森 彦資	川口 元吉	山崎助太郎	山田 光男
川口金太郎	田代孝太郎	竹内 國二	鈴木 吉平
村木 連	鈴木芳五郎	上嶋新五郎	遠藤 一重
稲葉 巖	小澤 寛	加藤 省三	加藤 清
土屋照治郎	稲葉 米吉	向田 行輝	稲葉 幸三
秋永 輝雄	加藤 太郎	稲葉 恵一	木村 武志

### ●昭和38年 5月

八代 五郎	上嶋新五郎	木村 武志	川口金次郎
-------	-------	-------	-------

大森 彦資	稲葉 米吉	山崎助太郎	斎藤 信夫
小澤 寛	村木 連	稲葉 恵一	太田 鉄蔵
渡辺 時雄	遠藤 一重	加藤 省三	秋永 伴義
片野 和正	竹内 國二	飯田 吾郎	加藤 清

### ●昭和41年 5月18日 (補選)

古屋長次郎	梅原 恭教
-------	-------

### ●昭和42年 4月28日

秋永 守	稲葉 米吉	上嶋新五郎	渡辺 時雄
稲葉 恵一	斎藤 信夫	大森 彦資	石井 勇
飯田 利作	八代 五郎	山崎助太郎	山口 忠
片野 和正	嶋田 長光	斎藤 八蔵	森田 輝彦
遠藤 一重	小池 寛	秋永 伴義	村木 連
加藤 清			

### ●昭和46年 5月20日

田村 元	鈴木 良雄	萩原 静男	前田 慶司
片野 和正	石原鉄五郎	八代 五郎	鳥沢 富雄
坂田 義武	飯田 利作	山口 忠	石井 勇
飯田 五郎	秋永 守	山本千代野	小池 寛
大森 彦資	渡辺 時雄	森田 輝彦	加藤 省三

### ●昭和49年 5月13日 (補選)

飯田 哲夫	金指保太郎
-------	-------

### ●昭和50年 5月20日

長谷川一雄	萩原 静男	鈴木 良雄	山田大八郎
鈴木 邦治	田村 又吉	嶋田 正剛	外岡 聖松
山口 忠	山田 力男	吉間 一郎	田村 元



石原鉄五郎 山田 儀祐 前田 慶司 石井 勇  
 小林 幸男 飯田 哲夫 鈴木 忠志 飯田 五郎  
 大森 彦資

●昭和54年5月20日

小池 寛 山田大八郎 小林 幸男 石井 勇  
 嶋田 稔 萩原 静男 外岡 聖松 鈴木 忠夫  
 石原鉄五郎 嶋田 正剛 石原 驍 田村 元  
 長谷川一雄 木田 祐久 田村 又吉 吉間 一郎  
 鈴木 邦治 飯田 五郎 山田 儀祐 鈴木 良雄

●昭和57年5月17日(補選)

田村 孟夫 鳥沢 富雄 加藤 博正 片野 武  
 土橋 渡

●昭和58年5月20日

鳥沢 富雄 小林 幸男 長谷川一雄 外岡 聖松  
 萩原 静男 田村 健吾 鬼崎 敏幸 飯田 鉄郎  
 小ノ沢一雄 稲葉兼太郎 片野 武 田村 孟夫  
 加藤 博正 嶋田 稔 石原 驍 田村 元  
 鈴木 良雄 石井 勇

●昭和61年5月12日(補選)

上嶋弥五郎

●昭和62年5月20日

山田 直志 内山 恒昭 金指 武 田村 健吾  
 鬼崎 敏幸 小ノ沢一雄 稲葉兼太郎 片野 武  
 田村 孟夫 加藤 博正 石原 驍 嶋田 稔  
 鳥沢 富雄 小林 幸男 長谷川一雄 外岡 聖松  
 鈴木 良雄 石井 勇

7. 選挙の状況

(1) 町長選挙

年 月 日	有権者数	投票者数	投票率	定 数	候補者数
昭和41・5・18	10,333人	9,313人	90.18%	1人	2人
45・5・16	10,851	9,104	83.90	1	2
49・5・12	11,578	10,363	89.51	1	2
53・5・14	(無投票)				
57・5・16	11,759	10,689	90.90	1	2
61・5・11	11,967	10,742	89.76	1	2

(2) 町会議員選挙

年 月 日	有権者数	投票者数	投票率	定 数	候補者数
昭和38	9,175人	8,104人	88.33%	20人	人
41・5・18 (補 欠)	10,333	9,319	90.88		
42・4・28	10,114	9,383	92.77	20	27
45・5・16 (補 欠)	(無投票)				
46・4・25	11,049	10,270	92.25	20	23
49・5・12 (補 欠)	11,578	10,360	89.48		
50・4・27	11,844	11,042	93.25	20	21
54・4・22	(無投票)				
59・5・16 (補 欠)	(無投票)				
58・4・24	(無投票)				
61・5・11 (補 欠)	(無投票)				
62・4・26	12,028	10,918	90.77	18	20



## (3) 県会議員選挙

年 月 日	有権者数	投票者数	投票率	定数	候補者数
昭和38	8,946人	7,206人	80.55%	人	人
42・4・15	10,327	7,668	74.25	2	4
46・4・11	10,990	9,480	86.26	2	3
50・4・13	11,749	9,929	84.51	2	3
54・4・8	(無投票)				
58・4・10	(無投票)				
62・4・12	(無投票)				

## (4) 県知事選挙

年 月 日	有権者数	投票者数	投票率	定数	候補者数
昭和42・1・29	10,252人	7,996人	77.99%	1人	4人
42・1・27	10,987	6,623	60.28	1	3
49・7・7	11,593	9,037	77.95	1	3
53・6・18	11,866	6,403	53.96	1	3
57・6・27	11,728	6,689	57.03	1	2
61・6・22	11,978	6,102	50.94	1	3

## (5) 衆議院議員選挙

年 月 日	有権者数	投票者数	投票率	定数	候補者数
昭和42・1・29	10,423人	8,001人	76.76%	5人	9人
44・12・27	11,155	8,040	72.08	5	9
47・12・10	11,639	9,180	78.87	5	10
51・12・5	12,211	10,003	81.92	5	9
54・10・7	12,154	9,505	78.20	5	9
55・6・22	12,165	9,944	81.74	5	8
58・12・18	12,166	8,696	71.77	5	7
61・7・6	12,164	8,534	70.16	5	7

## (6) 参議院議員選挙

年 月 日	有権者数	投票者数	投票率	定数	候補者数
昭和43・7・7	10,751人	7,947人	73.92%	2人	5人
46・6・27	11,306	7,289	64.47	2	5
47・12・10	11,633	9,167	78.80	2	4
49・7・7	11,847	9,070	76.56	2	7
52・7・10	12,139	8,696	71.64	2	6
55・6・22	12,165	9,941	81.72	2	5
57・6・26	12,106	7,889	65.17	2	5
58・12・18 (補欠)	12,116	8,680	71.64	1	2
61・7・6	12,164	8,533	70.15	2	4

資料：選挙管理委員会



## 第8節 決算の推移

決算の推移（一般会計）

（単位 千円）

	歳入		歳出		町税	
	金額	指数	金額	指数	金額	指数
34	87,865	100.0	82,901	100.0	28,896	100.0
35	116,186	132.2	112,436	135.6	41,679	144.2
36	155,553	177.0	131,495	158.6	54,039	187.0
37	197,406	224.7	177,736	214.3	66,180	229.0
38	251,970	286.8	241,022	290.7	84,530	292.5
39	237,004	269.7	236,645	285.5	110,742	383.2
40	229,059	260.7	226,323	273.0	128,156	443.5
41	310,849	353.8	286,229	345.3	153,281	530.5
42	630,600	717.7	555,216	669.7	176,813	611.9
43	491,253	559.1	389,400	469.7	214,520	742.4
44	569,708	648.4	462,906	558.4	245,745	850.4
45	679,246	773.1	597,750	721.0	312,688	1,082.1
46	650,272	740.1	528,899	638.0	372,948	1,290.7
47	931,715	1,060.4	775,933	936.0	444,110	1,536.9
48	1,284,431	1,461.8	1,054,433	1,271.9	583,367	2,018.9
49	2,126,899	2,420.6	1,577,209	1,902.5	990,889	3,429.2
50	2,166,877	2,466.1	1,901,002	2,293.1	981,313	3,396.0
51	2,193,522	2,496.5	1,922,878	2,319.5	1,047,290	3,624.3
52	2,627,837	2,990.8	2,354,535	2,740.2	1,135,110	3,928.3
53	2,979,242	3,390.7	2,720,884	3,282.1	1,215,343	4,205.9
54	3,054,633	3,476.5	2,665,865	3,215.7	1,291,175	4,468.4
55	3,363,468	3,828.0	3,093,339	3,731.4	1,398,380	4,839.4
56	3,286,771	3,740.7	3,117,160	3,760.1	1,467,301	5,077.9
57	3,782,830	4,305.3	3,571,034	4,307.6	1,563,791	5,411.8
58	3,893,289	4,431.0	3,615,842	4,361.6	1,734,094	6,001.2
59	3,386,062	3,853.7	3,160,561	3,812.5	1,801,385	6,234.0
60	3,569,537	4,062.5	3,361,510	4,054.8	1,833,964	6,346.8
61	3,857,001	4,389.7	3,661,342	4,416.5	2,015,915	6,976.5
62	3,882,184	4,418.4	3,583,733	4,322.9	2,183,859	7,557.7

## 第9節 東伊豆町の経済力

本町の経済は、観光経済が約85%という大きなウェイトを占め、町民の所得形成の中心的役割を担って名実共に観光の町となっている。

全国の市町村のなかで、温泉観光経済が高い順に述べれば、別府市、熱海市、加賀市、松山市、伊東市、続いて6番目栃木県の藤原市、和歌山県の白浜町と、この東伊豆町で競っている。

本町の観光の発展は、昭和30年代に始まり高度成長の時期で都市に人口が集中し、一方地方は過疎化がはげしく進んだ。賀茂広域圏1市6か町村もこの例にもれず、甚だしく過疎化に悩まされてきた。しかし東伊豆町だけは逆に人口が序々に増加し榮えてきた。

昭和34年東伊豆町が誕生して以来農漁業経済から見事に観光経済に転換を成し遂げたことが大きく町経済の発展をもたらした。これは明治時代田村翁が築いた天下の模範村と並び称されてもよい、町の経済史の特筆ではなからうかと思う。

そして、この観光経済の発展は次の特徴をもっている。

第1に地域の人々の手によった。前述した通り高度成長期に多くの地方は過疎に悩んできたが、そのなかで発展した市町村は工場誘致という外部の大手資

本によって地域の振興が図られたが、当町は、地域の商工業者、農業漁業者等が観光旅館に転換挑戦することによって成し遂げてきた。一部には外部よりきて観光旅館業を営んだ人もあるけれど、それはすべて中小企業であった。

第2に、下田市等と比較して歴史的、自然的観光資源に乏しかったことや、交通上でも中間地域というハンデーを背負い資本力もきわめて弱い当町が観光的に賀茂広域圏のなかで輝ける町を築いて来たことは、ひとえに、観光旅館業者等のたくましい開拓者精神の結果であったと考える。

第3に電車・道路の開通があげられる。最大の要因は、昭和36年に伊豆急行鉄道、昭和37年に東伊豆有料道路の開通、昭和48年に大島航路の開設等の交通事情も大きく貢献している。あわせて高度経済成長初期の大衆レジャーの幕明けの時流に乗ったことによるものと思われる。

東伊豆町の経済の仕組（昭和60年度）

東伊豆町経済構成を産業の生成過程でみると、地域の経済に波及効果を及ぼす産業とこれを前提に成立する産業に分類すると

第一群産業 地域経済に波及力のある産業、観光産業と第1次産業の農業、漁業等である。

波及効果率、観光約90% 農漁業約6%



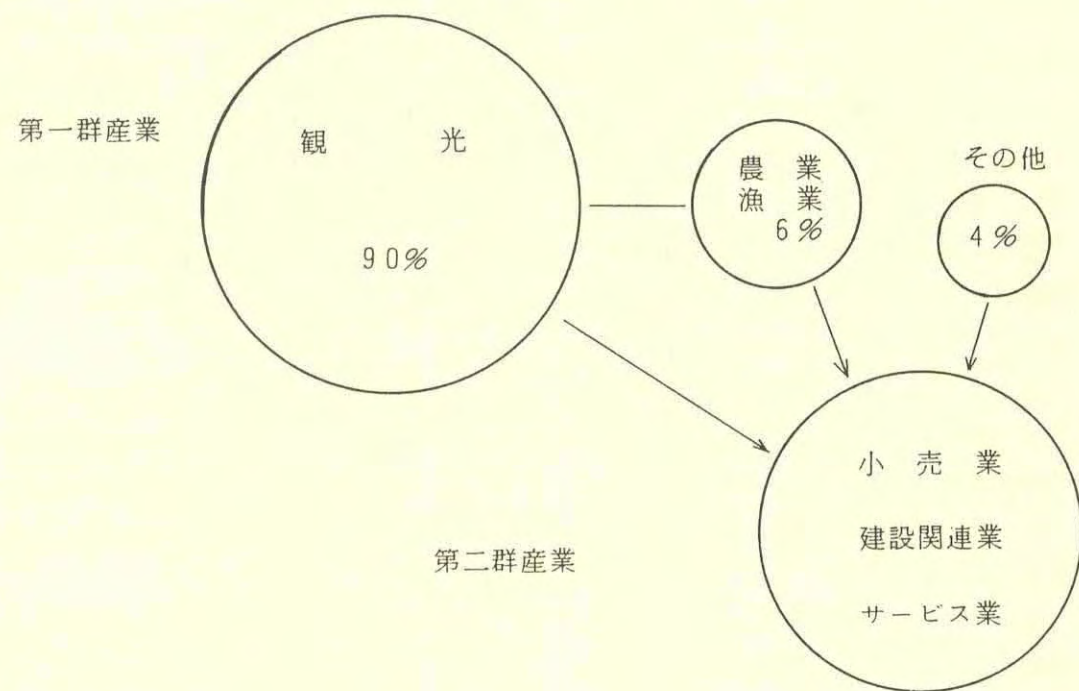
その他約4%と推計される。

第二群産業 第一群産業を前提に成立する産業

小売業、建設関連業、サービス業等である。

以上の通り区別することができ、観光のウェイトが如何高いかが理解され、観光に超特化されている町ということができる。

よって、第一群産業の観光産業の将来を探り、続いて農業、漁業を考察し、第一群産業との関連しながら、経済活動が営まれる第二群産業の順序で摸索してみる。



下田市、賀茂郡町村の財政力指数

(%)

市町村	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年
下田市	62.9	62.1	61.4	59.0	62.0	66.0	71.0	71.0	72.0
東伊豆	84.2	74.0	73.7	74.0	74.0	74.0	78.0	78.0	79.0
河津	47.1	46.5	44.1	45.0	44.0	45.0	46.0	48.0	49.0
南伊豆	43.2	42.6	41.6	41.0	40.0	39.0	39.0	39.0	39.0
松崎	32.0	32.6	32.6	33.0	34.0	36.0	38.0	39.0	40.0
西伊豆	38.2	36.0	36.6	36.0	37.0	37.0	37.0	37.0	38.0
賀茂村	25.8	26.3	27.3	27.0	27.0	27.0	28.0	28.0	27.0

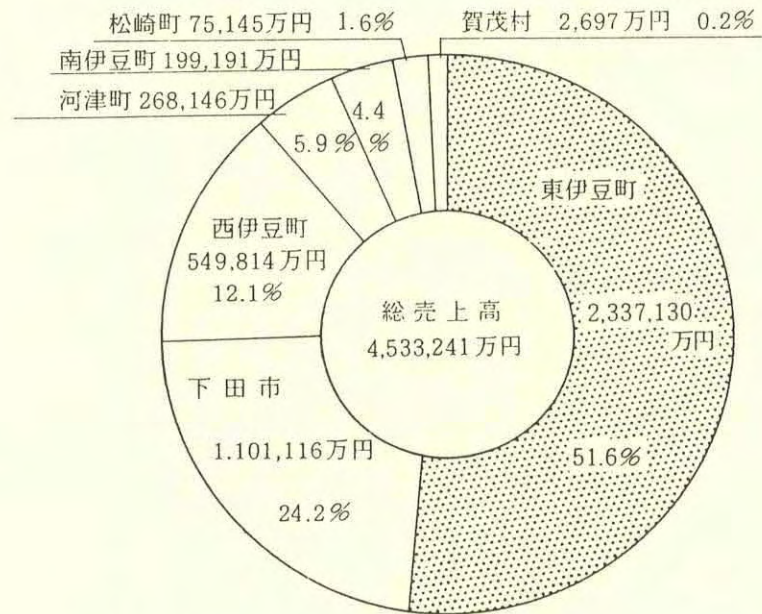
財政力指数とは、

地方公共団体の財政力の強弱を示す指標として用いられるもので、普通交付税の算定に用いる基準財政収入額を基準財政需要額で除して得た数値の3年間の平均値である。



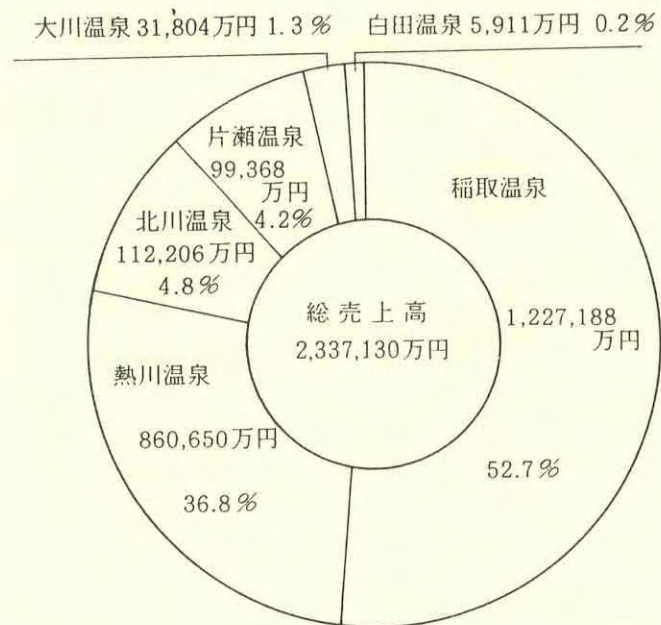
### 昭和60年度 賀茂地区別旅館売上高構成

(下田財務事務所調査による)



### 昭和60年度 東伊豆町地区別旅館売上高構成

(下田財務事務所調査による)



# 第 2 章



## 第2章 合併前夜

### 第1節 合併前の稲取町・ 城東村

#### 1. 稲取町

##### (1) 合併前の概況

伊豆半島東海岸伊東市と下田町の間に位し東南は太平洋に面し西は天城火山の支脈たる三筋が峰より小幡石山、大峯を経て海岸向山に至る連峯を以って河津町見高と境し、北は三筋が峯より桃の頂上、白土、ニツ石、郷引、針崎が峯を経て瀬入より海岸の奇石狭石に至る山間の窪地をもって城東村白田と隣し、ちょうど箕のようであり、広ぼうは東西広き所6.443km、狭き所1km余、南北5.089km、面積12.89km<sup>2</sup>である。

港は近年築港工事により防波堤及び岸壁設備など完備し、第三種漁港の指定を受け、遠洋かつお、まぐろ漁業の根拠港として飛躍しつつあり海上約28kmを隔て伊豆七島の雄、大島三原山を望み全町概ね丘陵であり、気候温暖にして海岸線は約5.8kmに達し、遠洋漁獲物の水揚高は郡下第一であり寒天原藻のてんぐさは全国第2位といわれる水揚高を誇り、また、丘陵地帯は伊豆特産蜜柑は品質とも県下第1位を誇っている。海岸線に沿い二級国道小田原下田線が町の中央を貫通し、また、海岸線に沿い最近良質の温泉の湧出を見るに至り観光資源にも恵まれ観光

客の往来もはげしくなりつつあった。

##### (2) 沿革

稲取町は、其の昔川津の庄に属し、山手方大久保に三戸、同水下に七戸あり、みなその姓を異にしその処に居住し農耕を営み、現在町民の住する処を厚木平と称したという。流人鎮西八郎源為朝八丈島にて討手をうけたときその臣保科内膳という者八郎の次男為家を乗せ、ひそかに八丈島を逃れ出て相州富岡に至り富岡主水と称し、忍んで居たが、その子富岡主税之助に至り初めて厚木平に來り住したと伝えられている。

管轄は古代は詳らかでないが、慶長6年より幕府直轄となり、代官彦坂小刑部より伊奈半左衛門まで22代三島の支配所に属す。宝暦9年5月江川太郎左衛門之に代る。天明5年水野出羽守の領地となり明治2年菊間藩知事水野出羽の直轄となる。同年7月菊間藩を廃し、菊間県管轄となる。同年11月菊間県を廃し足柄県管轄となる。明治9年4月18日足柄県を廃止せられるにつき静岡県所轄となり明治22年県令第19号をもって稲取村の区域名称及び役場位置を設定した。大正9年12月1日をもって町制を施行し稲取町となり今日に至った。

#### 2. 城東村

##### (1) 合併前の概況

伊豆半島の東海岸伊東市と下田町とのほぼ中間に位し、南伊豆賀茂郡の表玄関



をなしている。

東南は伊豆七島を指呼の間に望む太平洋に面し東北は石神、藤久保等の山林地帯から草崎川の溪流により伊東市赤沢部落と境している。西部から西南部は一之沢、安場所、石神等の山林原野地帯から国有林地を経て田方郡上狩野村、賀茂郡河津町に接し、南部は三筋か峯より浅間原野地帯を下り海岸に至り奇石ハサミ石を標石として稲取町と接している。広ぼろは東西8.6km、南北8.7km、総面積65.02km<sup>2</sup>である。

天城山に源を発する白田川、濁川、向田川は上流林間地帯において特産わさびを産して下流において水田をうるおし相模灘に注いでいる。また、下流一体は各所に温泉噴出し熱川温泉、片瀬温泉郷として広く全国に知られている。

丘陵地帯は気候風土に恵まれ温州みかん、夏みかん、ネーブル等の柑橘類を始めさや豌豆等の特産物の栽培が盛んであり、観光の発展とこれに結びついた産業の振興がはかられつつある。

## (2) 沿革

城東村は、昔は河津の庄に属し後白田、片瀬、奈良本、大川の4か村に分かれていたが、明治22年村制施行の際合併して一村となった。

その沿革については、古代は詳かでないが天正16年頃三島支配所代官伊奈慶蔵、彦坂小刑部等の御縄打に属し、徳川幕府

の直轄となり小田原城主大久保出羽守の守領江川太郎左衛門支配所を経てから白田村、片瀬村は韮山県、奈良本村、大川村は菊間県となり、明治22年市町村制施行の際発展的解消をなし、城東となった。その後明治24年、全村が足柄県の管轄となったが、明治29年改めて静岡県の管轄となった。

## 第2節 合併前夜

昭和28年9月1日公布による町村合併促進法の施行を機に静岡県町村合併試案が示され、城東村、稲取町の合併が勧奨された。

ついで昭和32年3月31日。静岡県知事名により、城東村及び稲取町合併勧告書が出された。

稲取町、城東村当局はこの勧告を受け、地勢上からも、産業経済、観光文化の面からも一体性をなし、近き将来に鉄道の敷設、二級国道の整備等による交通の利便がはかられる現況において、この両町村が合併し、行政規模の適正化をはかり、住民の福祉増進を期す事が最善であると判断した。これが実現のためには、多大な努力と、決断を必要とする事がわかっていたが、合併促進に向け動きだした。

しかし、関係町(村)住民は合併の必要性を認めながらも、交通面の開発が他地区に比して遅れていることや、合併に

## 勸告書

賀茂郡稲取町(城東村)

新市長村建設促進法第28条第1項の規定により静岡県新市長町村建設促進審議会の意見をきき内閣総理大臣に協議して別記のように貴町(村)に係る町村合併に関する計画を定めたので、これに基づき合併を行うよう同法同条同項の規定に基づき勧告する。

昭和32年3月35日

静岡県知事 斉藤 寿夫 ㊟

(別記)

町村合併に関する計画(関係分)  
賀茂郡城東村及び稲取町を合併すること

地 第762号

昭和34年4月7日

稲取町長(城東村長)殿

静岡県知事 斉藤 寿夫 ㊟

稲取町及び城東村の合併に伴う役場庁舎の位置等について

稲取町及び城東村の合併に伴う役場庁舎の位置等については、別紙によることが適当と思料するので、御了承の上円満に問題を処理せられたい。

(別紙)

一、新町の議会議員の定数は24人とし、稲取地区及び城東地区に選挙区を設け、各選挙区において選挙すべき議員の数は各12人とする。

一、新町の庁舎の位置及び建設は、新議員が建設計画において協議して定めるものとし、それまでの間は現在の稲取町役場を使用し、現在の城東村役場を支所として使用する。



ついて諸々の意見の一致にやや困難性があった。その間、町（村）当局、町（村）職員、議会議長、議員が幾度かの会議を持ち、公聴会や部落懇談会等を開いたが、ここに幾多の問題（基本財産と漁業権の財産区設置の件、新町名の設定、新町役場位置等）が起き合併促進が難行した。

そこで、県知事並に係官、県の町村合併促進委員、賀茂支庁長並びに係官に並々ならぬ指導を受け推進にあたった。重ねて説得のため県から総務部長、地方課長補佐、高橋主事、竹下賀茂支庁総務課長に来町（村）をお願いして説得に当たっていただいた。その結果各地域で一気に合併の気運が高まった。

ついで、昭和34年4月14日、稲取町及び城東村の合同合併委員会が開催され、前述の問題になった事項をもちこんだ覚書が決定された。

ここに反対気運の強かった城東村が一転賛成になってきた経過については、当時城東村役場助役であった山本保さんの話によると次のようである。

元城東村助役 山本 保  
町村合併前夜の城東村

1. 町村合併に対する城東村民の反応  
明治22年町村制施行後、大正、昭和にわたり村民が営々として築き培われた風土と人情が町村合併によってどう

なるかという不安ととまどいが村全体を覆い官公民、個人、団体を問わず全面反対一色の騒然とした様相であった。

2. 合併反対の一色から急転合併推進に変わった経緯

県当局その他公的方面からの強い合併推進の指導によるほか合併は国の施策であり時代の要請でこれに逆らう事は出来ない。いわゆる大義名分にしたがうという事が最大の理由であった。

尚県当局より地方課勤務の太田家次氏（奈良本出身、後の市町村課長）が急きょ来村し説得につとめたことも大きな力にもなった。

3. 一方稲取地区は、スムーズとは言わないまでも、早々と合併の意思統一を終り城東村の出口を見守る状態であった。

4. 村長の合併反対に対する対応と推進説得の方策

議会も反対の態度を崩しておらず、村当局としては、県当局、県議会内の推進委員会より強力な推進指導を受け、大義名分に則って当局に同調するよう村民に要請し、反対緩和に努力した。その方法として部落懇談会方式で部落民の参集を請い（議会の協力を得られないまま）誠意をもって合併の趣旨とその功罪について説得に当たった。

しかし、議会からも全面協力もなく当局としては孤立無援の中に部落懇談

会を進める中で、村民一体の合併反対の信議に反して中途に於いて賛成の態度に変わったことに対しその不信は各部落を問わず、各種団体、個人からも強く難詰された。その上県当局からは促進をしいられ、村民からの突上げも強く進退極まる場面に逢着することもしばしばあった。

やがて、数次にわたる部落懇談会に於ける、熱意と努力が反対論を緩和し、国策に従い国家形成の基礎的町村としての重要な事に鑑み感情的、自我意識にこだわる事なく時代の大きな流れに、逆らい将来を誤る事は忍びがたいという大乗的の見地により住民の理解がある程度得られ、県下でも最も難町村と見られていたが、ようやく合併に踏み切ったのが真相である。

#### 覚書

1. 新町の庁舎の位置等は、昭和34年4月7日の知事の斡旋条項により措置するものとする。

(1) 新町の議会議員の定数は24人とし、稲取地区及び城東村地区に選挙区を設け、各選挙区において選挙すべき議員の数は各12人とする。

(2) 新町の庁舎の位置及び建設は、新議員が建設計画において協議

して定めるものとし、それまでの間は、現在の稲取町役場を使用し、現在の城東村役場を支所として使用する。

2. 関係町村の財産は、左の通り措置するものとする。

(1) 稲取町及び城東村の所有に係る財産（一切の権利義務共）は新町に引継ぐことを原則（以下「原則」という。）とする。

(2) 左記財産は原則によるべきものであるが、諸般の事情により次のように処置するものとする。  
① 城東村有地の内99ヶ年貸付契約の原野は、新町において関係者に無償払下げ処分とするものとする。

② 稲取町有地の内約230町歩の採草地の処分については、別途稲取町の合併委員会の定めるところによる。

③ 稲取町及び稲取町漁業協同組合の共有に係る漁業権は、原則によることが、漁業権設定の経過に鑑み困難であるため財産区を設けることとするが、これがため原則によるべき漁業権に関連する町有の土地施設等もこれに含めるものとし、その管理運営については、住民の福祉を増進し、新町の一体性をそこな



わないよう原則に従って処置するものとする。

昭和34年4月14日

稲取町合併委員代表  
稲取町長 鈴木芳太郎  
稲取町議会議長 竹内 國二  
城東村合併委員代表  
城東村長 鈴木恒三郎  
城東村議会議長 木村 武志  
立会人  
賀茂支庁長 青島玄太郎  
地方課長補佐 深澤 文男

昭和34年4月17日午前9時より、稲取町役場、城東村役場に臨時町(村)議会が招集され、合併のための議案が審議され満場一致で承認された。ついに「東伊豆町」の発足を待つばかりになった。

稲取町議会臨時会会議録(抜すい)

一、昭和34年4月17日午前9時稲取町議会を稲取町役場に招集した。

一、出席議員は次の通りである。

1番 上 嶋 長 蔵	2番 村 木 連	3番 鈴 木 吉 平
4番 川 口 金次郎	5番 山 下 常 雄	6番 竹 内 国 二
7番 大 森 彦 資	8番 中 村 玉 助	9番 太 田 鉄 蔵
10番 山 田 光 男	11番 村 木 宇左エ門	12番 八 代 由 太
13番 山 村 吉五郎	14番 鈴 木 慎	15番 太 田 伊之助
16番 田 代 孝太郎	17番 鈴 木 芳五郎	18番 川 口 元 吉
20番 広 瀬 重 利	21番 山 崎 助太郎	22番 渡 辺 長 松

一、欠席議員

なし

午前10時50分一同着席

一、会議事件は次の通りである。

議第30号 賀茂郡稲取町及び城東村を廃しその区域をもって東伊豆町を置くことについて

議第31号 賀茂郡稲取町及び城東村を廃しその区域をもって東伊豆町を置くことに伴う財産処分について

(以下略)

城東村議会臨時会会議録(抜すい)

一、昭和34年4月17日城東村議会臨時会を城東村役場会議室に招集した。

一、出席議員は次の通りである。

1番 稲 葉 米 吉	2番 木 村 武 志	4番 野 沢 繁右エ門
5番 坂 田 穂三郎	6番 加 藤 清	7番 土 屋 豊太郎
8番 土 屋 照治郎	9番 飯 田 利 作	10番 常 盤 寿 平
11番 前 田 理	12番 小 沢 寛	13番 秋 永 能 雄
14番 向 田 行 輝	15番 高 羽 太一郎	16番 渡 辺 為治郎
17番 土 屋 友 吉	18番 森 田 直 徳	20番 飯 田 吾 郎
21番 稲 葉 幸 三	22番 太 田 正 三	

一、欠席議員は次の通りで

3番 高 橋 良 雄 19番 稲 葉 恵 一

午前1時40分開議

一、会議事件は次の通りである。

議第1号 賀茂郡稲取町及び城東村を廃しその区域をもって東伊豆町を置くことについて

議第2号 賀茂郡稲取町及び城東村を廃しその区域をもって東伊豆町を置くことに伴う財産処分について

(以下略)



議第30号（議第1号）

賀茂郡稲取町及び城東村を廃し、その区域をもって東伊豆町を置くことについて  
賀茂郡稲取町及び城東村を廃し、その区域をもって東伊豆町を置き、昭和34年5月  
3日から施行するものとし、これを静岡県知事に申請するものとする。

昭和34年4月17日提出  
昭和34年4月17日可決

賀茂郡稲取町長 鈴木 芳太郎  
（城東村長 鈴木 恒三郎）  
賀茂郡稲取町議会議長 竹内 国二  
（城東村議会議長 木村 武志）

議第31号（議第2号）

賀茂郡稲取町及び城東村を廃し、その区域をもって東伊豆町を置くこと  
に伴う財産処分について  
賀茂郡稲取町及び城東村を廃し、その区域をもって東伊豆町を置き昭和34年5月3  
日から施行するに伴い、稲取町有の別記財産は、稲取町を区域とする稲取財産区を設  
けてこれに移し、その他の関係各町村有財産（一切の権利義務共）はすべて東伊豆町  
に帰属せしめるものとする。

昭和34年4月17日提出  
昭和34年4月17日議決

賀茂郡稲取町 鈴木 芳太郎  
（城東村長 鈴木 恒三郎）  
賀茂郡稲取町議会議長 竹内 国二  
（城東村議会議長 木村 武志）

稲 総 第 11 号  
庶 第 15 号  
昭和34年4月17日

静岡県知事 斉藤 寿夫 殿

賀茂郡稲取町長 鈴木 芳太郎  
賀茂郡城東村長 鈴木 恒三郎

賀茂郡稲取町及び城東村を廃し、その区域をもって東伊豆町を置くこと  
について申請

賀茂郡稲取町及び城東村を廃し、その区域を以て東伊豆町を置き、昭和34年5月  
3日から施行したいので、右御取計い願いたく必要書類を添え関係町村長連署をもっ  
て申請いたします。（以下略）